
5 人の高校生活

月形 竹保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5人の高校生活

【Nコード】

N7741W

【作者名】

月形 竹保

【あらすじ】

コナンと哀を中心に始まった、5人の高校生活。
またも、クラスは分かれることもなく、仲良し5人は探偵部を始めようとするが…。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

一話目なので、人物紹介でほぼ終わってしまいました。
では、ご覧ください。

プロローグ

新一からコナンとなつて一年。

FBIと協力し、組織は壊滅へと追い込んだ。

しかし、哀とコナンの望んだAPTX4869のデータは、組織によりメインコンピュータが破壊されたことで、手に入れられず、解毒剤の研究は頓挫してしまった。

そのまま、数年が経ち、帝丹高校入学式当日。

いつもの交差点に向かう二人。

「あつ！コナンくん、哀ちゃん！！おはよう。」

大きな声で挨拶してくるのは、吉田歩美。人当たりのいい性格で、誰からも好かれる女の子。胸くらいまで伸ばした真っ直ぐな髪を、両耳の上でヘアピンでとめている。

黒目がちな瞳が可愛く、男子からは絶大な人気を誇っている。

高校入試を上位の成績で突破した才媛でもある。

「おはようございます。遅いですよ。お二人共。遅刻したらどうするんですか！！」

と、呆れた顔をしながら話しかけてきたのは、円谷光彦である。

歩美の右横に立つ、長身でそばかす顔の青年。

敬語で話すのは昔から変わらず、礼儀正しいと、上級生の女子から、

絶大な人気を誇る。歩美同様、入試を上位で突破した頭脳明晰さである。

歩美の左横からは、

「おゝっす！おせーぞ、お前ら！！早く行こうぜ。」

と叫ぶ、小嶋元太。

ガツチリとした体軀は、中学から始めた柔道に因るものだ。

無駄の無い、しなやかな筋肉で引き締まっている。その見た目と、大らかな性格から、男女問わず下級生から人気がある。

3人に答えるように、

「よお、わりーわりー。博士が哀の制服姿を写真に撮りたいってきかなくてな。」

といったのは、古びた黒縁眼鏡を掛けた江戸川コナンだ。

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能と、三拍子揃った上に、紳士で優しいと、年齢関係なくモテ、その推理力は、警察関係者からも一目置かれる。

コナンの横を歩きながら、疲れたように、

「おはよう。全く、博士にも困ったものだわ。」と呟くのは、灰原哀。

白く透き通るような肌に、翡翠の瞳、赤茶のウェーブがかかった髪は肩口で切りそろえている。

誰もが振り返るような美貌だが、その瞳は冷めていて、人を寄せ付けようとしなない。

才色兼備で、スポーツも得意。人見知りをする性格故か、クールビユーティーと言われるが、男子からの人気は高い。

プロローグ（後書き）

何だか、分かりにくいですね。

誤字、脱字と気づいた方は、知らせていただけると有り難いです。
次話もよろしく願います。

クラス分けとこれから（前書き）

今日、2度目の投稿。
あまり先に進まない…。

クラス分けとこれから

帝丹高校へ向かった5人は、クラス分けの掲示板前で固まった。

「……………」

「これで10年連続同じクラスか。何か怖いな。」

「えゝ？コナン君、コレはもう、奇跡だよ！！」

「そうですよ。神様が5人は分けてはいけないうって言うてるんですよ！」

「少年探偵団は不滅だな！！」

「はあつ。とりあえず、教室に行きましょう。」

哀の言葉で、教室へと向かった。

当然のように、コナンと哀は隣同士に座り、その前に、歩美を挟むように光彦と元太が座った。

入学式は滞りなく過ぎ、放課後。

5人は一緒に帰りながら、これからのことを相談することにし、通りがかったファーストフード店に入り、昼食を食べることになった。

それぞれ食べたいものを注文し、ひとまず食べてしまうことにした。みんなが食べ終わり、歩美は話を切り出した。

「ねえ、部活なんだけど、【探偵部^{クラブ}】を立ち上げない!？」

「え？俺、柔道推薦で来てるから、柔道部に入るぞ？」

「元太君は、兼部って形を取れば大丈夫じゃないですか？」

「推薦で入った奴が兼部ってありなのか？」

「そうね、ちよつと難しいと思うわ。」

「えゝ？そうなの!？じゃあ、どうしよう…。5人いないと部になれないのに。」

「同好会じゃダメなの?」「哀ちゃん…、だって、格好良くないんだもん。」

「だったら、同好会ってつけなきゃいいんじゃないか?」

「そうですよ。【探偵倶楽部】ってするのはどうでしょう?」

言いながら、光彦は紙とペンを取りだし、【探偵倶楽部】と書いてみせる。

「それなら格好いいかも!でも、元太君がいないんじゃ、淋しいね。」

「それについては、俺と哀で先生に掛け合ってみるよ。」

「要は、先生を言い負かせばいいのよね。歩美ちゃん、安心して。どうにかしてみせるわ。」

「わゝい。哀ちゃん、コナン君、よろしくね。」

「ところで、2人とも、高校では、2人が付き合ってること、公にするんだよね?」

「「え…?」「」

「あゝっ!やっぱり、黙ってるつもりだったんだ。」

「いい加減、公表しちゃうばいじゃないですか。何を躊躇ってるんですか?」

「そうだぞ。言っちゃえば、ラブレターも呼び出しも無くなるんじ

「やねーか？」

「まあ、そうなんだよな。哀、公表してもいいか？そうすれば、俺も嫉妬で狂いそうにならなくてすむだろうし。」

「コナン…。そう、そうね。私も、もう嫉妬で胸を痛めるのは辛いわ。」

「良かった。これでみんなに訊かれても、無理に誤魔化す必要ないもんね。」

「良かったです。僕たちも良心が痛まなくなります。」

「よし！明日からは訊かれたら、小2から付き合ってるぞって言うからな。」

「ああ、頼むよ。」

「よろしくね、みんな。」

クラス分けとこれから（後書き）

読んでいただき、感謝です。

次も出来るだけ早く書けたらいいと思います。

ガールズトーク（前書き）

女の子同士の会話は、なんだかちよつと難しい。

途中で回想シーンが入ります。

ガールズトーク

「あつ、やべえ！俺、1時から、柔道部に顔出すんだった！！わりいけど、俺行くな。明日な。」

と元太は急いで荷物をまとめて走っていった。

「じゃあ、解散にする？」

「そうですね。僕たちは帰りましょうか。」

「あ…、あのさ、コナン君、ちょっと哀ちゃん借りてもいいかな？」

「え？まあ、構わないけど。どうした？」

「コナン！！」

強めに名前を呼ばれ、驚いて哀の方を見ると、節目がちに首を横に振っていた。

コナンは、

『ああ、光彦のことか。』

と一人で納得し、頷く。

そして、

「じゃあ、俺も光彦に話があるから、ここで分かれよう。哀、後でな。」

「ええ、後でね。円谷君、また明日。」

「はい、歩美ちゃん、灰原さん、また明日。」

コナンと光彦を見送って、改めて哀の方に向き直り話し出す。

「哀ちゃん、私ね、光彦君に告白しようと思うの。」

「そう。」

「うん、だって、もう待つのは疲れたもん。」

「小嶋君に1個下の彼女が出来たんだから、遠慮しないで言えばいいのに、煮え切らないのよね。」

「私も、光彦君も、同じ経験をしてるから…。」

「え？同じ経験？？」

「うん。私さ、コナン君のことが好きっただたでしょ？あの頃、光彦君は、哀ちゃんが好きだったんだよ。」

「ええ、そうだったわね。」

「でも、2人が付き合い始めて、気付いたの。あれは、恋じゃなかったって。」

「恋じゃない？」

「うん。アレはね、憧れだったの。自分とは違う世界を持った人に対する憧れ。彼といれば、私も同じ世界を見れるんじゃないかってね。」

「円谷君も？」

「たぶんね。あの当時、コナン君も哀ちゃんも、すごく大人びてた。一緒に居ても、二人だけは違うものを見てる気がしてたの。」

「まあ、あの頃はね…。」

「だから、2人が付き合うことにしたって聞いたとき、ショックだったけど、納得できたの。」

「あの後も、変わらず接してくれたものね。」

哀はあの日のことを思い出して、優しい笑みを浮かべていた。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬。

組織壊滅の少し前、コナンは、哀に気持ちを告げた。

勿論、蘭には多少の嘘を交えて説明し、気持ちが他に向かったこと

を告げてからだ。

哀は、蘭に促され、素直な気持ちをコナンに伝えた。そうして、2人は付き合いだしたのである。

告白の翌日、学校に行く道すがら、探偵団の3人にその旨を伝えた。その時の歩美と光彦の顔は、一瞬、悲しみに沈んだが、次の瞬間には、いつもの笑顔を見せていた。

「そっかあ、やっぱりね。そんな気はしてたんだ。歩美は、2人を応援するよ！だって、2人とも同じくらい大事だもん。」

「そうですね。僕もお二人はお似合いだと思います。応援しますよ。」

「だよな！俺も、おまえら二人はくつつくと思ってたぜ。」

「みんな…、ありがとう。」

哀は少し涙ぐみながら、笑顔でお礼を言って、コナンと指を絡めた。

コナンは、そんな哀の指をしっかりと握り、

「サンキューな。」

といい、嬉しげに顔を綻ばせた。

~~~~~回想終了~~~~~

「ふふつ。思い出しちゃったね。」

言いながら、ペロツと舌を出した歩美に、

「ええ、良い思い出よ。」

と微笑み返した。

まじめな顔に戻り、

「歩美ちゃん、たぶん、コナンが今頃、円谷君に説教してるわよ。早く告白しろってね。」

「えっ!?!」

「実はね、彼には言ってたのよ。歩美ちゃんが悩んでることをそれでね、せっついて頂戴ってお願いしておいたわ。」

「哀ちゃん…。」

「だからね、あなたから告白はしないで平気だと思うわ。」

「本当!?!ありがとっ、哀ちゃん!大好き!!」

「お礼は、ちゃんと告白されてからよ。」

と言うと軽くウィンクをした。

そして、2人は、軽い足取りで店を後にした。

ガールズトーク（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分、女なのに、ガールズトークを書くのに苦労しました。
というか、会話自体が難しいです…。

次は、同じ時間軸で、コナンと光彦の会話です。

迷いと決意（前書き）

予告通り、前話の時間軸で、男の子同士の会話です。

迷いと決意

歩美と哀がガールズトークをしている頃、コナンは光彦を連れて、近所の公園に来ていた。

空いていたベンチに座り、真剣な表情で話し始めた。

「なあ、光彦。高校にも無事入れたしさ、そろそろケジメをつけないか？」

「何の話ですか？」

「歩美ちゃんだよ。気付いてるんだろう？歩美ちゃんが誰を好きなのか。元太だつて悟つたんだ。オメエが気付いてないはず無いよな？」

「コナン君…。そうですね。元太君は、僕を気遣つて、下級生と付き合いだしたんですね。」

「ちよつと違うな。あれは、タイミングが良かったんだ。元太は、中学に上がる頃には、歩美ちゃんのことは諦めてたよ。オメエをせつなくするために敢えて、諦めてないフリをしてたんだ。」

「そんな…。」

「まあ、やつと気付いたんだろ？それが逆効果だったって。だから、前から気になつてた後輩の告白を受け入れたんだ。」

「そうだったんですか。それなのに、僕が行動に移さないから、内心、呆れてるんでしょうね。」

「呆れてると言うよりは、怒ってるかもな。」

「僕はどうすればいいんでしょうか？」

「どうするもこうするもないだろ。明日、朝一で告白しろよ。」

「あつ、明日ですか！？心の準備が…。」

「そんなこと言つてると、歩美ちゃんがしびれ切らして、自分から告白してくるぞ？」

「それは困ります！！告白は、僕からしたいです。コナン君もそうだったんでしょう？」

「ん？俺か？ああ、俺からだよ、勿論。」

コナンはその時のことを思い出し、遠い目をした。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬、組織壊滅の少し前のこと。

その日、FBIからの連絡で、近い内に組織へ乗り込むことが決まった。

コナンの隣でそれを聞いた哀は、何かを決意したような顔で、一つのカプセルを差し出した。

「工藤君、これで、24時間だけ元に戻れるわ。だから、組織との対決の前に、蘭さんに説明してあげて！そして、あなたの気持ちも彼女に伝えてあげてほしいの。勿論、事情を説明するために、私も一緒に元に戻るわ。」

「灰原…。分かった。幼児化のことと、組織の詳細については言わないで、出来るだけ真実を話そう。」

「出来るだけ早い方がいいわね。明日はどう？日曜日だし。」

「ちよつと聞いてみるな。」

コナンは、新一の携帯と蝶ネクタイ型変声機を持ち、蘭に電話をかけた。

「あ、もしもし？蘭か？オレ。新一だよ。」

“新一！？本当に新一なの？今どこにいるのよお。”

「ああ、心配かけてすまねえな。明日、朝10時に阿笠博士の家に来れるか？話があるんだ。」

“心配なんかしてないわよ！明日の10時ね。大丈夫よ。”

「じゃあ、わりいけど、頼むな。明日、待ってるから。」  
“分かった。じゃあね。”

「平気だつてさ。何時に解毒剤飲めばいいんだ？」  
「そうね、朝7時かしら。データもとりたいし。」  
「じゃあ、今日は泊まるな。」

翌朝10時、約束通りに蘭は阿笠邸の門をくぐった。  
出迎えた博士に挨拶をし、リビングに行くと、そこには、新一と見知らぬ美女が立っていた。

「新一！来たよ。おはよう。そちらの人は？」

「ああ、蘭、おはよう。呼び出して悪かったな。彼女は、宮野志保。今、関わってる事件の依頼人だ。」

「ふうん、毛利蘭です。よろしく！」

「…、宮野志保です。」

ペコリと頭を下げる志保。その髪はストレートだった。哀との関係を探られないようにとった対応策である。

「まあ、座ろうぜ。今、コーヒー淹れるからよ。」  
「工藤君、私が淹れてくるわ。その間に説明を。」  
と言い、席を立ちキッチンへと向かった。

志保がコーヒーを淹れている間に、大まかな概要は説明した。  
そして、まだ解決しておらず、詳しいことは話せないことも言うておいた。

そして、志保が3人分のコーヒーを入れて戻ってきたところで、  
「ねえ、新一、その事件、解決の目処が立ったから、話してくれて  
るんだよね？」

「ああ、まあな。」

「じゃあ、それが終わったら、帰ってこれるんだよね！？もう、ど  
こにも行かないんでしょ？」

「あ…、いや、もしかしたら、無事には戻って来れないかもしれね  
えんだ。」

「どういうこと？そんなに危険なの！？」

「ああ、敵は、血も涙もない犯罪組織だからな。それに…」

言葉を濁す新一を不審に思い、蘭は先を促した。

「それに、何？」

「蘭、俺、オメエにさ、ずっと、待っててくれって言い続けてきた  
よな？」

「うん。だから、私、ずっと待ってたんだよ。」

「ああ、分かってる。そんなこと言って待たせてたのに、俺は、も  
し、無事に帰ってきてても、オメエのそこには戻らねえ。」

「工藤君！？あなた、自分が何を言ってるかわかってるの？」

「新一…、どういうこと？」

新一は、神妙な顔をして、

「俺、宮野と行動をとにもするようになって、気付いたことがある  
んだ。」

蘭は目だけで先を促す。

「蘭に感じていた思いは、義務感から来る、庇護欲であって、愛や  
恋では無かったんだ。蘭のことは、守らなきゃいけない、大切な奴  
だと思ってた。だけど、宮野は、俺が、自分の手で守りたい、幸せ  
にしてやりたい奴なんだ。」

「貴方、何を言ってるの？それは、姉のことがあったからでしょ！  
！それこそ贖罪の気持ちじゃない。」

「いや、違っただ。確かに、お姉さんを助けられなかったのは、今でも後悔しているさ。でも、それとこれとは違う。オメエの涙を見て、俺は決めたんだ。コイツを一生守っていくと。俺の人生をかけてでも、オメエを幸せにするってな。」

「新一…、そつか。何か、納得しちゃったな。私は大丈夫。実は、昨日ね、新出先生に告白されたの。新一を待ち続けるのも疲れちゃってね、受けようと思ってたところなの。」

「え？蘭さん？本当にそれでいいの？」

困惑した様子の志保に、いつもの笑顔を向け、

「ええ。だから、宮野さん、新一に、ちゃんと答えてあげて。」

「蘭さん、ごめんなさい。そして、ありがとう。」

志保は、涙を流しながら、蘭に頭を下げた。

そして、涙を拭い、新一へと向き直る

「工藤君、私も、初めて会ったときから、貴方が好きだったの。」

「宮野！いや、志保、俺の手でオメエを幸せにしたい。愛してる。ずっと、俺の傍にいてくれるか？」

「ええ！工藤君、私も愛してる、ずっと、傍にいるわ。」

蘭は、二人を見守り、そつと阿笠邸を後にした。

~~~~~回想終了~~~~~

「コナン君？いきなり黙り込んで、どうしたんですか？」

「あつ、いや、ちよつと思ひ出してな。」

「ちなみに、コナン君は、灰原さんに何て言っただ告白したんですか

？」

光彦が、興味津々な様子で聞いてくるが、

「へっ、誰が教えるかよ！それは、哀だけが知ってればいいことだぜ？」

「ケチですねえ。」

「で？告白する決心はついたか？」

「はい！頑張ります！僕も、コナン君や元太君に負けてはいられませんがね。」

二人で不敵に笑い合い、しっかりとした足取りで公園を後にした。

迷いと決意（後書き）

ちよつと長くなつてしまいました。

回想シーンは、前話の回想の前の日の話です。

次は、光彦、いよいよ告白か！？

告白↑盗み聞き(前書き)

いよいよ、光彦君の告白です！
その時、3人は…。

告白 ↑ 盗み聞き

公園からの帰り道、コナンは、光彦に切り出した。

「明日の朝は、お前ら2人で行けよ。そんな時に告白しろ。元太と哀には言つとくからさ。」

「登校中にですか?」

「ああ、改めて呼び出すのは勇気がいるぞ?」

「そうですね。呼び出す時点で相当緊張しますよね。」

「だから、無理矢理にでも二人きりの状況を作った方がいいだろ?」

「……はい。」

「じゃあ、明日は頑張れよ!」

「コナン君!ありがとうございます。また、明日。」

「おう、じゃあな。」

翌日、待ち合わせの少し前。

光彦はいつもの交差点に、歩美と二人きりでいた。

他の3人はというと、近くのビルの陰で身を潜めて二人を見守っていた。

「なあコナン、あいつ、本当に言えんのか?」

「大丈夫だろ? 昨日、ちよつと脅しかけといたしな。」

「あら、脅し? でも、それくらいしなきゃ、動かないわよね。まったく、奥手なんだから。歩美ちゃんが可哀想だわ。」

「でもよあ、こんなに離れてるんじゃ、会話聞こえねえじゃんか。」

「元太、俺を誰だと思ってんだ? ぬかりはねえよ。昨日の帰り際、光彦の襟の裏に着けといたんだ。」

不敵な笑みで、盗聴器の受信ボタンを押した。

「ふふ。悪い人ね。」

「やるなあ、コナン! 流石だぜ!!」

「おっ！何か喋ってるぞ。」

「おはよー。光彦君！あれ？みんなは？？」

「おはようございます。歩美ちゃん。あ…、皆さん、今日は別で行くそうです。」

「え？どうして？」

「あの、そのお、実はですね、僕、歩美ちゃんに話したいことがありまして…。」

歩美は、内心ドキドキと期待に胸を膨らませつつ、

「な・何？」

「あの、歩きながらも良いですか？遅刻するとマズいですし。」
少し、緊張した面もちながらも、まずは、場を和ませようとする。

「そうだね。遅刻はダメだよね！」

「はい。行きましよう。」

歩美を促しながら歩き出した。

その後ろを、一定の距離を保ちながら、ついていく3人。

「なかなか、切り出さないわね。」

「光彦のことだ、何て言おうか迷ってるんじゃないか？」

「なあコナン、学校まで、そんなに距離無いぞ？本当に大丈夫か？」

と、話していたその時、

「歩美ちゃん！あの、僕、歩美ちゃんのことを、好きなんです！」

「言えました。とうとう想いを伝えました。何のひねりもなかったですけど、顔もスゴく熱いんですけど、僕は、頑張りました！」
と、光彦が心の中で叫んでいると、

「…ほん…とう？光彦君、私のこと、好き…？」

歩美は、戸惑ったような、信じられ無いような気持ちで聞き返した。
「はい！本当です。ずっと歩美ちゃんを好きなんです。僕と、付き合ってもらえますか？」

歩美は、嬉しさのあまり、涙を零しながら、

「わ…たし…、私も光彦君が好き。ずっと好きなの。」

「歩美ちゃん！」

光彦は、そんな歩美を、抱きしめた。通学路だということは、最早、頭にはなかった。

あと5分で予鈴がなるという頃、見かねたコナン達が、声をかけた。

「おい、いつまでそうしてる気だ？」

「あと、5分でチャイム鳴るぞ！！」

「これで、学校中に広まるわね。」

抱き合ったまま二人の世界に入っていたため、突然のことに、二人は驚愕した。

「ええっ！！？3人とも、先に行ったんじゃないの？」

「うわっ、あの、その、あ…っ！学校！！早く行きませんか！」

恥ずかしいやら、嬉しいやらで、ごまかしきれないことに気付かない二人。その場をやり過ごそうとするが、

「まあ、詳しいことは、後で聞いわね。歩美ちゃん。」

「光彦！報告しろよ？」

「結果は分かっているけどな。」

口々に言い、3人は走っていった。

残された2人は、顔を見合わせ、微笑み合ってから、急いで後を追うべく走り出した。

「待つてよー！哀ちゃーん。」

「待つてくださいよ！！コナン君、元太君！」

こうして、5人の高校生活は始まったのである。

告白 ↑ 盗み聞き（後書き）

無事に告白成功！！
次は部活かな。

広まる噂（前書き）

前話の直後、教室でのお話です。
探偵団の交際宣言！！

広まる噂

5人が急いで教室に駆け込むと…。

帝丹中学出身者が、それぞれ多数の生徒たちに囲まれるという状況にあった。

理由はもちろん、歩美と光彦の関係についてだ。

しかし、その2人を含む『帝丹中学少年探偵団』は、あまりにも有名すぎた。

男子生徒たちは、

「あの、探偵団の天使、吉田歩美に彼氏が!？」

「ウソだ、嘘だと言ってくれ……!!」

「俺たちの歩美ちゃんが……」

「でも、相手は円谷か…、勝てっこない……。」

などなど、歩美ファンの男子達の嘆きと嫉妬と諦めの声が、学校中、いや、近隣の学校にも響いていた。

そして、光彦ファンの年上女子からは、

「円谷君に彼女が出来たって。」

「えっ? 狙ってたのにい。」

「でも、あの、吉田さんでしょ!? 勝ち目くない?」

「とりあえず、フられるの覚悟であたってみようかしら……。」

など、未だ諦め切れぬざわめきが聞こえてきた。

ついでと言わんばかりに、コナンと哀の噂、元太の彼女情報も、一緒になって訊かれている。

「おいおい、流石にこれはないんじゃないかねえか？」

「そうね、でも、いいんじゃない？たまには事件以外のことで騒がれるのも。」

「そうだな！全部事実だしな！！」

「ちよっ！！元太君、そんな大きな声で！！！」

「そうだよ！元太君、そんなこと大声で言ったら…。」

「ねえねえ、さっきの話本当！？」

「円谷君と吉田さんって、付き合ってるの？」

「江戸川君と灰原さんも！？」

「小嶋君には一個下の彼女がいるって本当？？」

と、いつの間にか、5人はクラスメート達に囲まれ、矢継ぎ早に質問されていた。

「あゝ！！もう、ちょっと待て。順番に答えるから。な？」

コナンは、若干キレ気味でその場の全員に向けて言い放つ。

「まずは、歩美ちゃんと円谷君ね。」

冷静に話を進める哀に、歩美は頬を朱に染めながら、

「き…今日から、私と光彦君は付き合い始めたの。」

周りの男子へ鋭い視線を向け、

「歩美ちゃんは僕の彼女ですから！！」

と言い、一呼吸置いて、先程より大きめな凛とした口調で、

「僕には歩美ちゃん以外考えられません！」

と言い切った。

少しざわめく生徒たちを余所に、

「言うじゃねえか、光彦！次は、コナンと灰原だな。」

と元太が次を促すと、

「ああ。俺と哀は小2の冬から付き合ってる。」

「かれこれ、7年以上になるわね。」

言いながら、2人は肩を寄せ合い、コナンは哀の腰に手を回した。

「俺には、哀しか女に見えないし、哀さえいればいい。他はいらないから。」

コナンは皆の前で、哀に甘い言葉を囁く。

哀は照れながらも、

「コナン、私もよ。貴方が隣に居てくれるなら、他に何もいらな
わ。」

と言り返す。

甘過ぎる言葉にあてられる者多数。

故に、コナン・哀ファンは、一瞬で諦めざるを得なかった。

あまりに美男美女過ぎて、間に割ってはいいるのも、些か難しいものがあるのも、理由の一つだ。

そして、最後に、

「俺も、帝丹中の3年に彼女がいるぞ。来年、ここに入ってくる予定だ。俺も、あいつ以外眼中にないからな。」

と、元太は淡々と語った。

5人が話し終わると、友達と話し合う者、ケータイでメールを打ち始める者、どこかに電話しだす者、席につき静かに泣く者などがいた。

しかし、哀とコナン以外、誰一人として気付いていないことがあった。それは、チャイムが鳴り、担任教師が教室に入ってきていたことだった。

教師としては、注意をしようかとも思ったのだが、何とも、話しかけづらい状況だったため、つい、見守ってしまったのだ。

それがいけなかった。

ホームルームを始めるタイミングを逸してしまい、途方に暮れる羽目になったのだから。

そんな教師を見て、哀とコナンは、部活申請のための作戦を練りだしたのだった。

広まる噂（後書き）

これで、全校に、いや、近隣の学校中に広まったはず。
部活申請の話は、次話に持ち越しです。

勧誘（前書き）

今回は、部活の勧誘がメインです。

この騒動を乗り越えれば、探偵部が立ち上げられるが…。

勧誘

新入生が、学校に慣れてきたある日のこと。
2・3年生による部活への勧誘が始まった。

特に、1-Aの教室では、運動部・文化部共に激しい勧誘が行われていた。

理由は、少年探偵団の4人である。（元太は柔道部への入部が決まっているで特になし）

コナンと光彦には、サッカー部、ミステリー研究部から。
哀には科学部、ミステリー研究部、料理部から。

歩美には、テニス部、新体操部、ミステリー研究部から。
それぞれ、休み時間の度に囲まれて、勧誘されていた。

今までの、探偵団の実績を知り、ミステリー研究部はかなり本気で4人の勧誘に乗り出していた。

しかし、サッカー部も負けじと、男子2人を勧誘しようと躍起になっている。中学時代、2人はサッカー部に在籍していて、共にチームを引っ張り、大会ではそれなりの活躍を見せていたのだ。

歩美への、テニス部と新体操部からの勧誘は、どちらにも仲のいい先輩が居たのが理由だ。中学の体育祭や球技大会で、歩美の運動神経が良いのは実証されていた。

哀への科学部からの勧誘は、ある科学雑誌に載った、哀の研究論文によるものだ。

料理部は、噂で哀が毎食、自分で料理をしていると訊いたからとか。

こんな勧誘の嵐の中、3人は冷静に対応していた。

「先輩方、申し訳ないのですが、私（僕）は、新たに部活を立ち上げる予定ですので、他の部への入部は出来ません。諦めて、教室へ戻って下さい。」

と、毎回毎回繰り返すのだった。

昼休みの屋上で、5人はお昼を食べていた。

コナンは哀に、光彦は歩美に作ってもらい、元太は彼女から登校途中で受け取っている。

それぞれのお弁当を広げながら雑談していた。

しかし、突然真面目な雰囲気になり、コナンは切り出した。

「なあ、そろそろ、本気で先輩方からの勧誘をどうにかしねえと、探偵部立ち上げらんねえぞ？」

「そうね、相手するのも大変だし。何か良い案ないかしら？」

「まずは、みんな共通のミス研部からですね。歩美ちゃん、活動内容はわかりますか？」

「うん。図書室でミステリー小説を読んでも、視聴覚室でミステリー映画観てるかだつて。」

歩美は、元来の人懐こい性格で、探偵団の情報収集を担当している。

「そうか、じゃあ、簡単だな。」

「どうすんだ？」

元太は、特に迷惑はかかってないが、探偵団の一員として、協力は

惜しまない考えだ。

「ああ、ウチの蔵書の話をしりゃいいんだ。学校の図書室程度の蔵書なら、既に読む物はないってな。」

「工藤邸の蔵書は半端じゃないものね。」

そう、コナンは、中学に上がったとき、工藤夫妻と養子縁組みをしたのだ。苗字が違うのは、皆がそれに慣れていたのと、【江戸川コナン】でいると決意したからだ。

「そっか、中学の時に、みんなで読み漁ってたもんね!!」

「では、ミス研部はそれで良いとしまして、コナン君、サッカー部はどうしよう?」

「あゝ、ウチのサッカー部ってどの位のレベルだっけか?」

「地区で上位だけど、全国区じゃなかったはずよ。」

「うん、バランスはいいんだけど、決定力に欠けてるみたい。」

「2人とも、サンキュー。なら、俺たちと勝負をして、こっちが勝つたら、今後一切、関わらないって約束させるか。」

「いいですね!まず負けることはないでしょう。あ、元太君、キーパーやって貰えますか?」

「おっ!俺の出番か!?!いいぜ。任せとけ!!」

コナンは、中学のサッカー部では、実力の半分も出さずにプレーしていた。

光彦は、小学生の頃からコナンとサッカーをしていたので、自ずとレベルは高くなっていったのだ。

元太は、柔道で鍛えた瞬発力とパワーがある上、光彦同様、サッカーセンスもいつの間にか身に付いていた。

この3人なら、例え上級生相手でも負けることはないだろう。

「私の科学部と料理部は、問題ないわ。どちらもレベルが違うから。部に入る意味ないし。あの程度なら、言い負かすのは容易いわ。」

「私の方も、大丈夫だと思う。先輩たちも、ノリで誘ってるだけだし。周りが落ち着いたら、平気のはず！」

「そっか。じゃあ、まずは、放課後、ミス研部撃退だな！」

そこで、昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴り、5人は教室へと戻っていった。

勧誘（後書き）

最近の高校には、どんな部活があるんでしょうねえ？

次回は、撃退編です！！

撃退く文化部編く（前書き）

文化部編です。

誤字が有ったので修正しました。

2011/11/04 編集

撃退く文化部編く

放課後、元太を除く4人は、ミステリー研究部の部室の前にいた。

歩美が調べたところ、ミス研は、放課後、一旦部室に集まって、ミーティングをしてから、図書室か視聴覚かに揃って移動するらしい。したがって、ホームルームが終わって直ぐのこの時間は、部室にいるはずである。

「まずは、ココからだな。」

「上手くいくかな？」

「大丈夫よ。歩美ちゃん。彼がちゃんと言い負かすわ。」

「では皆さん、良いですか？行きますよ？」

コンコン

光彦がドアをノックした。すると、中から、

「はい、どうぞ。」

と言って、部員の山本（2年）がドアを開けながら、

「ようこそ。ミステリー研…きゅう……、あつっ!!」

言い終わらぬ内に、驚きの叫びになった声に、

「いきなり大声を出すんじゃない！皆に迷惑だろうっ!!」

と部長の北村から、怒声が飛んだが、山本はそれどころではなかった。

「あ…、ああ、た・たた探偵団!!!!」

「えっ！？なっ何っ！まさか!!！？ちよつとどけっ！」

どもる山本を押し退け、北村部長が扉の前に来た。

「こんにちは。部長さん。」

歩美が笑顔で挨拶をする。

「やあ、君たち、やっと入部する気になってくれたんだね!!」

満面の笑顔で北村部長は4人を歓迎した。

しかし、次の瞬間、光彦の言葉で部長以下8人の部員達は、凍りついた。

「いえ、正式にお断りするのに、一応、そちらの活動内容を知っておこうと思ひまして。」

すかさず哀は、

「今日は、何をするんですか？」

と質問を浴びせた。

いち早く、正気に戻った部員が、

「あ、えーっと、今日は、図書室で小説を読む予定だけど。」

と答えると、

「本は、図書室のを読んでるんですか？そんなに、置いてなかったと思ひましたけど。」

とコナンが再び質問をする。

「ああ、図書室のただだよ。持ち込みは禁止にしてるんだ。盗難とかがあると困るからね。」

「そうですか、じゃあ、やっぱり、僕達が入部することはないですね。」

コナンはサラリと言い切った。

やっと先ほどの衝撃的な発言から立ち直った北村部長は、その言葉に、

「なぜ！？君だって、ホームズが好きだろう！！図書室には全巻揃ってるよ！」

どうにか興味を引こうと、ホームズの話を出してみるが、

「ウチの書斎にも全巻揃ってます。僕の養父はあの、工藤優作ですよ？世界中のあらゆるミステリーを収集してます。僕がまだ読んでいないのは、原文で書かれてるものだけです。まあ、それも、もう、

そんなにないですけどね。そんな、僕に図書室にある、何を読めと仰るんですか？皆も、中学の頃にウチで、日本語に訳されてるのは読んでますから、今更読むものありませんよ。」と、淡々と説明した。

すかさず光彦は、

「何か、他に断る理由は必要ですか？」

歩美も、

「それに、私たち、今までの経験を生かして、新しく部活立ち上げますから。」

最後に哀が、

「これ以上、私達を勧誘するのは、止めていただけますね？」と、極上の笑顔で有無を言わず、頷かせた。

固まった部員達を部室に残し、颯爽と去っていく四人だった。

「上手くいったね！」

「事実しかいってないんですけどね。」

「最後の哀の笑顔でKOだったな。」

「これで、ちよつとは静かになるわね。」

教室に戻り、帰り支度をしながら、話していると、

「あ、私、ちよつと料理部と科学部に行ってくるわ。先に帰ってても良いわよ。」

と哀は言って、鞆を置いたまま教室から出て行った。

「あゝ、俺、哀を待ってるから、オメーら先帰って良いぞ。」

「いえ、コナン君、サッカー部のことでちよつとお話しが…。」

「ん？何だ？今日は無理だぞ。元太いねーし。っつーか、やるなら、

昼休みだな。」

「そうですね。僕も、昼休みがいいと思ってました。そうじゃなくて、人数ですよ。」

「人数？」

「はい。キーパー入れて3人はやっぱりツライと思うんですよ。せめてもう一人……。」

「ああ、確かにね。でも、サッカー部の奴らには頼めねーし。あいづら、わざと負けそうだしな。」

「そ、そうですね。どうしましょう？」

2人が悩んでいると、歩美がおずおずと口を挟んだ。

「あ……あのさ、2人とも、……私で良かったら、一緒に戦うよ？」

「……えっ!？」

2人は、思いがけない言葉に、目を見開いて驚いた。

「だってね、私だって、みんなとサッカーで遊んできたよ。運動神経は自信あるし、15分位で良いなら、フルで動けると思うの。」

「歩美ちゃん、いいのか？相手は男子だよ？」

コナンは、気遣うように聞くが、

「大丈夫!!今までだって、男子と試合してたもん。」

笑顔で言い返す歩美。

「でも、サッカー部だって本気で来るはずですよ!!ケガでもしたらどうするんですか!？」

心配しすぎて、少し声を荒げてしまった光彦。

「光彦君、大丈夫だよ。それにね、私だって、探偵団の一員だよ!協力させてよ。ね？」

諭すように光彦に言つて、最後は、得意のおねだり攻撃。

そう、歩美は、両手を顔の前であわせて、小首を傾げて見上げるようにお願いのポーズをしたのだった。

2人とも、頷いてしまった。

結局は、歩美に弱いのである。

光彦は、惚れた弱み。

コナンは、かわいい妹のおねだりとして。

そして、そのまま、コナン達3人は、サッカー部のいるグラウンドへ行き、サッカー部に、明日の昼休みに、試合をすること、内容として、

? 人数は、キーパー込みで4人（交代は自由）

? 試合時間は15分

? 試合時間内に、先に3点取れば、その場で試合終了

? 探偵団が勝てば、今後一切の勧誘行為は禁止

? サッカー部が勝てば、コナンと光彦は入部する

との条件で、試合の約束を取り付け、教室へと戻っていった。

3人がサッカー部の話をしている頃、哀はというと、料理部のいる、調理実習室に来ていた。

「こんにちは。部長さん。再三の勧誘のお返事にきました。」

と、哀が無表情でいうと、部長と呼ばれた3年の梶井は、満面の笑顔で歓迎した。

「いらつしゃい、灰原さん。良いお返事を持って来てくれたのね！」

「喜んでいるところ申し訳ないんですけど、私、入部しませんよ。習うべきこともありませんし、部活は、皆と新しく立ち上げますの

で、これ以上の勧誘は止めていただけますか？はつきり申し上げて、迷惑極まりないです。」

と、一息で言い切り、呆然と立ち尽くす部員達をそのままに、調理実習室を後にした。

そして、科学部のいる科学実験室へと向かい、ドアをノックした。
コンコン

「失礼します。」

「どうぞ。ようこそ……って、灰原さん！！まさか、入部！？」
入ってきた哀を見て、3年で部長の山縣は、喋りながら近づいてきた。

「いえ、これ以上の勧誘はご遠慮願おうと思ひまして、正式に断りにきました。」

「何故！？何がダメなんですか？」

「強いて言わせていただくなら、レベルですね。私の研究論文を読んだんですよ？100%理解できましたか？無理ですよ？高校や大学では習わないようなことも書きましたし。」

「たっ、確かに、僕達には理解できなかったけど、有名大学の教授達が、挙って誉めてたじゃないか！！そんな人が、何で科学部に入らないなんて言える？」

「理由は先ほど申し上げたでしょう？科学部で、私の研究を進めることは出来ないし、そもそも、理解していない人間と共同で実験しようとは思いませんから。実験のチームは、同レベルの人間が多数いることで、前に進めるのであって、1人が抜き出していたら、そのチームは、教える人と教わる人に分かれるでしょう？私には、教える気はないので、この関係は成り立ちません。今言ったことは理解できましたよね？」

哀の勢いに、啞然とする山縣と部員達。とりあえず、

「あ、ああ……。」

と頷いた。

「では、二度と勧誘などをしに、私の前には現れないでいただけますね？」

無表情で念を押す哀に、

「はい、すみませんでした。」

と、元氣なく応えた。

すると、哀は笑顔で、

「では、失礼しました。」

と言って、実験室をでて、教室へと向かった。

この後、哀への勧誘は一切なくなっただけなのは言うまでもないだろう。

30分程で戻ってきた哀と、コナン達は合流し、帰路についた。

帰り途中、3人は哀に、サッカー部とは、明日の昼休みに試合をすることや、歩美も試合にでることを話した。

撃退く文化部編く（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気を付けます。

撃退く作戦会議編く（前書き）

ごめんなさい。だいぶ更新が遅れた上に、サッカーの試合まで行き
着きませんでした。

撃退く作戦会議編く

翌朝、いつもの交差点で、いつものように挨拶を交わした5人は、今日の昼休みのサッカー部との試合について話し合い始めた。元太には、昨晚、コナンがメールをして、基本ルールの説明はしてある。

「とりあえず、位置の確認からしておきましょう。」

光彦は、鞆からノートとシャーペンを取り出しながら切り出した。

「ゴールキーパーには、元太。」

「おお！任せとけ！！」

「センターが俺で、右サイドに歩美ちゃん。」

「私が右サイドね！」

「ああ、で、光彦が左サイド。」

「いつも通りですね。」

「哀は、監督な。相手の分析を頼む。」

「ええ。分かったわ。」

「歩美ちゃん、相手のスタメンは予想できるか？」

コナンの問いかけに、ちよつと考えてから、

「3年でキャプテンの荒木先輩は確実だと思う。ゴールキーパーも、3年の梶井先輩のはず。あとは、3年の日比野先輩と、2年で、元帝丹中サッカー部キャプテンの牛島先輩かな。」

「げっ！牛島先輩！？」

「ヤバいですね。先輩は、僕たちのプレーを知ってますからねえ。」

「でもよお、俺と歩美のことは知らねえだろ？」

「まあ、それはそうか。サッカー部では、俺、本気出してねえしな。」

「そうよ。それに、向こうのデータなら、過去の試合をネットで検

索して、大体揃えたわよ。」

「ああ、昨日遅くまで調べてたのはそれだったのか。」

「あら。気付いてたの？」

「バーロオ、俺が気付かないわけないだろ。いつでもオメエのことを見てるんだからよ。」

少し照れながら見つめ合うコナンと哀に、

「ちよつと2人とも！！いい加減話戻してよね。」

と、呆れたように歩美が言った。

はつとして哀は、

「あら、ごめんなさい。大体のプレー傾向ね。荒木キャプテンは、技術的には中の下って感じがしら。パスは右サイドに回すことが多いわね。キャプテンただけあって、視野が広いから、敵味方両方の動きをよく見てるわ。今回は確実にセンターで来るはずよ。1対1は苦手。コナンなら楽にボールを奪えるわ。」

「中の下ねえ。パスさえ回させなきゃ取れるってことが。ディフェンスについては何かあるか？」

コナンは情報を整理しながら、哀に聞く。

「そうね…。ボールを奪つてるとこは見たこと無いわね。ああ、持久力は有るわ。ボールは奪われなくても、マークは外せないかもしれない。」

コレには、光彦が、

「うーん、少し厄介ですね。でも、コナン君のボールコントロールは秀逸ですからね。大丈夫でしょう。」

そこで元太が口を開いた。

「なあ灰原、シュートは何か、決まったコースとかないのか？」

「シュートは、殆ど外れるから。狙いとしては、いつも向かって右上。」

「そっか。まあ、とりあえず、いつでも右に跳べるようにしとくか。」

「でも、あくまで参考だから。頭に入れておくだけにしなさい。」
「わかった。」

と、そこで5人は高校に到着し、いったん教室に荷物を置いて、屋上へと向かった。

歩美が話の続きを促すために、

「次は、ゴールキーパーの梶井先輩ね。」

と言い、哀が、

「梶井先輩は、動態視力には優れているけど、瞬発力がそれに追いついてないわね。だから、近いところからのシュートに弱いわ。あと、足下を狙ったシュートも止め辛いみたい。」

「じゃあ、なるべく近くから、足下を狙えば私でもシュート出来るかなあ？」

と聞いてくる歩美に、微笑みながら、

「そうね。いけるかもしれないわ。チャンスがあつたら、思いっきり蹴ってみなさい。」

と哀は優しく言った。

「3年の日比野先輩は、たぶん歩美ちゃんの相手になるわ。」

「そうでしょうね。間違いなく、牛島先輩を僕に当ててくるはずですから。」

と光彦が少ししかめ面で言うと、

「まあ、その方が、光彦もやりやすいだろ？先輩の癖は分かっているし。オメエだって、先輩達がいる時は遠慮して本気出してなかったじゃねえか。」

「あはは、気付いてたんですね。遠慮してたの。」

「ああ、いつもの動きと違ってたからな。」

「コナン君には適いませんね。」

と、コナンと光彦が話していると、

「説明続けていいかしら？」

哀はジト目で2人を見る。

「すつ、すみません。」

「ああ、悪かったな。」

と2人は慌てて謝った。

「日比野先輩は、瞬発力に優れているわ。気を付けてないとマークを外されるかもしれない。でも、コントロールは悪いから、歩美ちゃんのスピードがあれば、ボールは奪えるかも。シュートは、キーパーから遠いところを狙う傾向にあるわね。」

「俺は真ん中にいていつでも動けるようにしとくな。」

「私は見失わないようにマークしないとだね。で、取ればボール取るよ！」

「歩美ちゃん、無理はしないで下さいね。」

「分かってるよお。光彦君ったら、心配性なんだから。」

歩美と光彦ははにかんで見つめ合っていた。

「イイ感じのそこワリイけどよお、そろそろ予鈴なるぞ。」

と元太が言ったので、5人は教室へと戻った。

次の休み時間は、教室で作戦会議を進めていた。

「牛島先輩は、知っての通り、持久力は無いわ。でも、今回は持久力関係ないのよね。とりあえず、注意するとすれば、技術力ね。特に得点力に関しては、他の2人とは比べものにならないわ。」

「ああ、でも、光彦なら止められるはずだ。」

「牛島先輩はテクニクは凄いですけど、ゴールまでのコースを考える時間がありますからね。そこを狙えばいける気がします。」

「考えてる時は足下疎かになるもんなあ。あの人。」

「ふふつ。そこは円谷君に任せるわ。」

「とりあえず、そんな感じかなあ？こっちの作戦は？」

5人は、急に真面目な顔になった。

「コナンを中心に左右へパスを回して、各自シュートのタイミング

を計って。ただそれだけで平気よ。コナン、あまり本気は出さないように。円谷君、あなたは本気出して。歩美ちゃんは瞬発力に自信を持って頑張って。小嶋君、ゴールはあなたに任せるわよ。絶対に入れさせないで。」

「よし！徹底的に叩きのめすぞ。でも、歩美ちゃんは、無理するなよ。怪我をしちゃあ、元も子もないからな。」

「うん。無理はしないよ。でも、一点は入れるんだから！！」

「俺は、一点も入れさせねえから、安心して攻めるよな！」

「では、僕は先輩に実力の差を見せつけてあげましよう。」

「その意気ね。昼休みが楽しみだわ。情報の修正は任せて。弱点探すから。」

「よし。後は、昼休みを待つだけだな。」

そうして、昼休みまでの残りの授業に集中するのだった。

撃退く作戦会議編く（後書き）

次話こそ試合です！

撃退くサッカー部編く（前書き）

やっと書けました。

サッカー好きな方、寛大な心で読んで下さい。

撃退！サッカー部編

昼休み。

5人は、早めに昼食をすませ、ジャージに着替えてグラウンドへと向かった。

アップのため、ゴールにいる元太に向かってシュートの練習や、パス回しの練習をする。

大団体が慣れてきた頃、サッカー部が現れた。

歩美の予想通りのメンバーが来ていた。

5分ほどサッカー部にアップの時間を与え、試合を始めることになった。

「先輩、正々堂々と勝負しましょう。僕たちは負けませんから！」
コナンは、4人の先輩達に宣戦布告をした。

荒木キャプテンは、ニヤツと笑い、

「ああ、こつちも負けるわけにいかないからな。」
と言って握手を交わした。

コイントスの結果、キックオフは探偵団からになった。

サッカー部は、荒木キャプテンを中心に右サイドに日比野先輩、左サイドに牛島先輩、そして、ゴールキーパーは梶井先輩だ。

『ピーーーーー！！』

試合開始のホイッスルが鳴った。

まずは光彦がコナンへボールを送り、攻撃開始！

光彦は左サイドをゴール方面に駆け出した。

その空いたスペースにコナンはボールを蹴りながら向かい、逆サイドの歩美は一度センターラインギリギリまで下がる。そこへ、牛島をかわして光彦が右サイドに走る。

コナンは光彦へパスをし、すかさず空いた左サイドをゴールへと向かう。

歩美は日比野を置き去りに真ん中へ走り込み、光彦からパスを受け、そのまま蹴り進めてゴールキーパーの左足から少し離れたところに思い切りシュートを打ち込んだ。

思いの外速い球に反応が遅れた梶井は、歩美の蹴った球を止められず、開始早々で1失点をしてしまった。

それが、しかも、年下の女子にである。ショックを受けたのは言うまでもない。

「きゃー！決まっちゃった♪哀ちゃん見た！？先制点だよー！！」
とハシャぐ歩美。

哀は、笑顔で拍手し、

「歩美ちゃん、その調子よ。頑張つて！！」
と声をかけた。

「俺たちも負けてらんねえな。」

「はい、頑張りましょう！次はディフェンスですよ。」
と、コナンと光彦の士気も上がる。

ショックから立ち直りきれしていない梶井は、とりあえず、荒木にパスを出した。

「よし！今の1点を取り返すぞ！！」
と声をかけながら、荒木はボールを蹴ってセンターラインまで来た。コナンは荒木をピタリとマークする。ここで、歩美が、日比野に振

り切られ、真ん中に向かって走り込む日比野にボールが渡った。
何とか追いついた歩美だったが、やはり、コンパスの差が、すぐに振り切られてしまった。

そのまま、日比野は元太から遠い、右上角を狙ってシュートを撃つ。
しかし、それを読んでいた元太にセーブされてしまった。

「くそっ!!」

悔しそうな声がした。

「みんな上がれ!!」

元太は叫びながら、左サイドに上がっていた光彦に思い切りパスをした。

難なく受け止めた光彦は、牛島と1対1でゴールを目指す。

コナン仕込みのボールコントロールで、巧みに牛島を翻弄する。
それをみたコナンは、邪魔をしないように右サイドに寄って場所を空けた。歩美もセンターライン付近で待機している。

流石に、加勢には行けないことを分かっているのか、荒木も、日比野も動けないでいた。

牛島は思った。

『あれ？円谷って、こんなに上手かったか？これじゃあまるで、中学時代の江戸川みたいじゃないか！円谷は、ちよつと上手いけど、周りに埋もれるタイプじゃなかったか？ここまで個人プレーで抜きん出てる奴じゃなかったはずだ。』

光彦は、それに気付いて、不敵に笑って、

「先輩、僕の実力は、あの頃とは違いますよ。今が、全力です。」
と言って、用は済んだと言わんばかりに、牛島を抜き、ゴールへと向かった。

牛島は、『しまった!』と思い、必死で追いかけて、スライディングで足下のボール目掛けて滑り込むが、楽にかわされた上に、シュートを撃たれてしまった。

光彦の蹴った球は、左に寄って待ち構えていたキーパーの右上を通り抜け、ゴールネットを揺らしたのだった。

「よつし！！2点目！」

とコナンは光彦とハイタッチをする。

歩美は光彦に抱きついて喜んだ。

「光彦君スゴい！」

「あ、歩美ちゃん、皆さんが見てますよ！！」

「おい、ディフェンスに戻るぞ。」

冷静なコナンの声に、赤面しながら光彦が返事をする。

「はっ、はい！歩美ちゃん、戻りますよ。」

「うん。」

そんな3人を微笑みながら見守っていた哀だが、急に険しい顔になり、牛島に鋭い視線を向けた。

『マズいわ。牛島先輩のあの目。不穏な気配がする。マークを変えさせようかしら。』

と考えていると、コナンと目があつた。

コナンも牛島の不穏な気配に気付いたらしい。

哀に向かって頷いてみせるコナンに、哀も頷く。

すると、コナンは光彦に向かって行き、

「光彦、荒木先輩についてくれ。何だか、悪い予感がするんだ。」
と言った。

「え？はあ、いいですけど。」

と答え、荒木先輩へと向かって駆けていった。

荒木は、今度は牛島にパスを出した。

「なあ、江戸川。お前は中学の時、全然本気出してなかったよな？」

円谷もなのか？」

と目が完全に据わり、睨みつけるように聞いてきた。

「はい。俺は、本気なんか出しませんよ。昔も…今もね。光彦は、先輩達を立てるのに、力を抜いてただけですよ。」

と、仕方無さそうに説明した。

少し考え込む牛島の足は、ほぼ止まっていた。

その隙についてコナンはボールを奪いつつ、

「先輩、あなたがそんなだから、光彦が本気を出せなかったんですよ。」

と言って、そのまま、ゴールへと一直線に向かう。

それに気付いた光彦と歩美は、フォローのため直走る。

ディフェンス陣は完全に出遅れてしまった。

そして、キック力増強シューズが無くても、充分に強くなった脚力で、キーパーの真正面、足の間を狙ってシュートを撃ち込んだ。

あまりのスピード、そしてパワーに微動だに出来なかったキーパーの後ろでゴールネットが揺れた。

開始から、12分後の出来事だった。

当初のルール通り、時間内に3点先取したので、試合は終了になった。

「先輩方、約束です。今後一切、サッカー部への勧誘は止めてくださいね。」

とコナンは、荒木キャプテンに握手を求めながら言った。

「ああ、約束だ。それは守ろう。みんなにも言うておく。」

「ありがとうございます。」

「牛島先輩、今まで、本気を出さずにいてすみませんでした。」

光彦は、牛島に向かって頭を下げた。

「いや、江戸川に言われて目が覚めたよ。俺達が弱すぎたんだな。気を使わせて悪かった。」

「いえ。では、先輩は、これからもサッカーを頑張ってください。僕たちは、探偵を頑張りますから。」

先ほどの不穏な気配はすっかりと消え、晴れ晴れとした笑顔になっていた。

最後、お互いに、

「ありがとうございました。」

と頭を下げて、試合は終了したのである。

その日以降、探偵団への部活の勧誘は無くなった。

撃退くサッカー部編く（後書き）

なんか、サッカーのルールとか無視でごめんなさい。
私にはコレが限界でした。

次は探偵部の活動内容が明らかに！？

探偵部（前書き）

探偵部、いよいよ発足！

誤字が有ったので、修正しました。

2011/11/04 編集

探偵部

部活勧誘も落ち着きを見せ始めたある日。

サッカー部との試合が、他の部にも噂になって聞こえ、探偵団への勧誘はすっかり影を潜めていた。

「なあ、そろそろ部活申請しないと始められないぞ?」

と、5人が屋上でお弁当を食べているときに、コナンは話し始めた。

「そうですね。まずは、申請内容を決めませんと。」

と光彦が応える。

「活動内容だよな。どうしようか?」

と歩美が訊いた。

「基本的には、『コナンに掛かってくる警察からの応援要請に応える』でいいんじゃないかしら。」

と哀が提案すると、

「ああ、そうだな。あとは、事件がない日だけど、その時は、『各自、探偵に必要な知識を身につけるための勉強をする』でどうだ?」
コナンは、前から考えていたことを言ってみた。

「うん! いいかも。私達、事件に遭遇しても、解決するのは大体、コナン君と哀ちゃんだもんね。私は情報収集位しかできてなかったし。良い機会かも。」

と、歩美は前向きに考えていた。

「僕も、良いと思います。コナン君や灰原さんに比べると、僕の知識は全然、足元にも及びませんからね。将来のことを考えても、勉強しておきたいです。」

光彦もコナンの意見に賛成だ。

「俺は、大体、柔道部の方に出てるから、何も出来ねえけど、良い

と思うぜ！！」

と、元太も頷いた。

「私も、まだまだ調べたいことがあるし、折角だから、医学だけじゃなくて法学とか、経営学も勉強したいわ。」

と哀も前向きだ。

「じゃあ、今日の放課後にでも、申請書作るか。」

「うん。歩美、後で申請用紙貰ってくるね。」

「僕も行きますよ。歩美ちゃん。」

「じゃあ、頼んだわね。2人とも。」

「あつ！俺の兼部の問題はどうすんだ？」

思い出したように元太は訊いてきた。

「ああ、それは、今日の放課後にでも、担任に聞いてみるさ。ちょうど柔道部の顧問だしな。」

「そうね。アレなら、言いくるめ……いえ、説得できそうよね。」

「じゃあ、ワリーけど頼むな。俺は今日も部活だから。」

「ああ、任せとけ。」

などと話していたら、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

そして、放課後。

ショートホームルームが終わり、担任教師が教室を後にしようとしたとき。

「先生！阪東先生！！！少しお話があるんですが、お時間いただけますか？」

とコナンは哀と共に、担任の阪東先生に声を掛けた。

「ん？なんだ？江戸川に灰原。今すぐか？」

と不思議そうな顔で聞き返してきた。

「部活動の新規発足についてなんですが、教室にいるので、後で来ていただいても大丈夫ですか？」

と哀が尋ねた。

「おう、じゃあ、荷物置いて、日誌に目を通してからでも良いか？30分しないで戻ってくるから。」

と阪東先生は聞き返した。

コナンと哀は、笑顔で、

「はい、では、お待ちしてます。」

と言って、軽く頭を下げて、机へと戻っていった。

コナンたちと入れ替わりで、歩美と光彦が、

「じゃあ、申請用紙取ってくるね。」

「行ってきます。」

と言って教室を出て行った。

「確か、申請用紙とかは、教員室に入って右側の棚にまとめて置いてあったよね？」

「はい。そのはずですよ。大丈夫です。すぐ見つかりますよ。」

など、会話をしながら、教員室へと向かっていた。

教員室に着くと、すぐに用紙を3枚ほど取って、教室へと戻って行った。

「あれ？歩美ちゃん、3枚も持って来たんですか？」

と光彦は歩きながら尋ねた。

「うん、だって、書き損じるかもしれないでしょ？予備だね。」

「ああ、そういうことでしたか。」

「大丈夫だと思うけど、一応ね。」

「ちよっと見せて貰えますか？」

「うん。はい、どうぞ。」

と、歩美は持つて来た内の1枚を光彦に差し出した。

「ありがとうございます。」

光彦は、それを受け取り、立ち止まって内容の確認をする。

「えーと、まず、部活名で、次に部員の学年・クラス・名前と、合計人数、それから活動内容で、最後に顧問になる先生の名前と承認印ですか。」

と光彦が呟くと、

「あっ！顧問……。」

と歩美がはっとして呟いた。

「とりあえず、コナン君と灰原さんに相談しましょう。」「そうだね！行こう。」

と、急ぎ足で教室へと戻っていった。

「おかえり。二人とも。」

「わざわざ悪かったな。」

と、コナンと哀は2人に言った。

「まだ先生戻って来てないんだよ。」

「先に申請用紙書いておきましょう。」

と言われた2人は、席に着きながら、申請用紙を渡した。

「ねえ、2人とも、ココ……。」

と、顧問記入欄を指差しながら、歩美が呟いた。

「ああ、そうだな。誰かにお願いしないといけねえんだよな。」
とコナンが応えた。

「そうね、誰かいないかしら？どこの顧問もやってない先生いるかしら？歩美ちゃん、調べられる？」
と哀が歩美に訊くと、

「うん。去年の卒業アルバム見れば大体分かるはず。あとは、それ

を元に先生たちに聞き込みしてみるよ。」

「じゃあ、僕も一緒にします。コナン君たちは、先生と話していただきます。」

「ああ、わかった。頼むな。」

「こっちは任せて。」

歩美と光彦は、再び教室を後にし、図書室へと向かった。

そのすぐ後、担任の阪東が教室に戻ってきた。

「江戸川に灰原、待たせて悪かったな。」

と言いながらコナンたちの座っている席まで来た。

「いえ、こっちが無理をお願いしているんですから、気にしないでください。」

とコナンが笑顔で言うと、

「そうか？じゃあ、さっきの話だが…。」

と話を切り出した。

「はい。先生は、柔道部の顧問をしてらっしゃいますよね？」

「ああ。」

「では、少しお願いがあるんですが。」

「何だ？」

「僕たち、新しく『探偵部』を立ち上げようと思ってるんです。」

阪東が口を挟む前に、哀が言を継ぐ。

「それで、部員は私達と円谷君、吉田さんなんですけどね？部になるにはあと一人、足りないでしょう？」

そのまま、阪東には口を挟ませずに、コナンと哀が、交互に話を進めていく。

「小嶋元太も、部員に入りたいんです。本人も最初から入る気満々です。」

「でも、彼は柔道推薦で来てるでしょ？」

「柔道部を疎かにしようとは思ってないんです。」

「ただ、探偵団の一員として、探偵部には参加したいというのが、本人の意向なんです。」

「メインでやるのは、勿論、柔道部です。ただ、俺達にとっても、元太…、いえ、小嶋は必要な存在なんです。」

「…どうか、探偵部にも部員登録させて貰えませんか?」「」
と、2人は深々と頭を下げた。

そんな2人に圧倒された板東は、無意識の内に頷いてしまった。

「あ…、ああ。分かった。」

それを訊いた2人は、満面の笑みを浮かべ、

「「ありがとうございます。」」

と再び頭を下げた。

「じゃあ、遅くならないうちに帰るんだぞ。」

と言つて教室を出て行つた。

「はい。ありがとうございました。」

「さようなら。」

と、2人も立つて応えて、先生を見送つた。

「何とかなつたな。」

「ええ。やっぱり簡単だったわね。」

「ああ。犯人追いつめるより遙かに楽だな。」

「ふふつ、比べるものじゃないわよ。」

と、哀は微笑みながら、コナンの肩に頭を持たせ掛けた。

「ははっ。そうだな。」

と応えながら、コナンは哀の腰に手を回して、引き寄せた。

そのまま、しばらくそうしていたが、廊下の方から足音が聞こえて

きた。

パツと2人が離れた瞬間、勢い良くドアが開いた。

「ただいま。」

「お待たせしました。」

と言つて、歩美と光彦が入ってきた。

「おう、どうだった？」

「何か収獲あつた？」

とコナンと哀は口々に訊く。

すると、歩美がにっこり笑つて

「うん！！見つけてきたよ。」

と言つた。

「あら、やっぱり2人は優秀ね。こつちも、OK貰つたわよ。」

と哀が言つと、

「本当ですか！？さすがお二人ですね。」

「まあな。で、そつちは、結局誰がいたんだ？」

「あつ、うん。あのね、1 - Bの担任の、大友先生。新任で、まだ

何も担当してないんだつて。」

「話をしてみたら、顧問になっていただけのそつですよ！」

「おつ！でかした。2人とも。じゃあ、さつさと記入しちまおう。」

「

と言つて、コナンは、新規部活動申請用紙にペンを走らせた。

？部活名 探偵部

？部員

部長：1 - A 江戸川コナン

副部長：1 - A 灰原哀

部員

1 - A 円谷光彦

1 - A 吉田歩美

1 - A 小嶋元太
以上、5名

？活動内容

- 1・警察からの応援要請に応え、事件解決に尽力する。
- 2・警察からの要請が無い時は、各自、探偵として必要な知識を身につけるため、勉強する。

例：法学、医学、薬学、経営学、語学など。

？顧問

1 - B 担任 大友永嗣

ここまで書いて、コナンはペンを置いた。

「あとは、顧問の承認印だな。」

「ええ。まだいるかしら？」

「いるはずですよ。」

「大丈夫！待っててくれるって言ってたもん。」

と話ながら、四人は教員室へと向かった。

「失礼します。1 - Bの大友先生いらっしゃいますか？」とコナンがドアを開けて訪ねると、

「はい。」

と声が返ってきた。

「おっ！探偵部だな。待ってたぞ！」

と言いながら大股で近づいてきた。

「お待たせしてすみません。これが、申請用紙です。内容の確認をお願いします。」

と、コナンが紙を差し出す。

「ああ。……、ん？この小嶋って、柔道部の有力株か？兼部させて大丈夫なのか？」

「あ、それは、柔道部の顧問で私達の担任の阪東先生に了承を得ました。」

と、哀が説明する。

「そうか、ならいいが。ん？この、警察からの要請って、どういうことだ？警察が高校生に事件解決を頼むわけ無いだろう？」

「先生、この辺の人じゃないんですか？僕達、すでに小学生の時分から、警察と事件を解決してきてるんですよ。」

「帝丹小（帝丹中）少年探偵団って言えば、この辺りじゃ、結構有名なんですよ！」

と、光彦と歩美は自慢気に言った。

「あ……ああ、そうなのか？じゃあ、それもいいでしょう。あとは、問題ないな。よし、ちよつと待つてろ。」

少し後退り気味で応え、用紙を持って机に向かった。

そして、判を押してコナンに返しに来た。

「ありがとうございます。後は、生徒会に提出して、承認を貰えば、活動開始だな。」コナンは、先生にお礼を言い、振り返って皆に話しかけた。

「はい！じゃあ、早速生徒会に提出に行きましょう。」

「5時まではいるらしいよ。」

「まだ間に合うわね。行きましょう。」

と話して、四人は教員室を後にした。

そして、生徒会室へ着き、ドアをノックする。

「失礼します。すみません、1-Aの江戸川と申しますが、会長はいらっしゃいますか？」

すると、奥から1人の女生徒が近寄ってきた。

「はい？会長は私ですけど。何ですか？」

と、スラッとした長身で、髪を短く切りそろえている女生徒が名乗

り出た。

「あ、沢村会長ですね？今、お時間よろしいですか？新規部活動申請用紙を記入して来たんですが、目を通していただけますか？」

と言つて、コナンは申請用紙を差し出す。

会長はニコリと笑つて、
「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、拝見しますね。」
と言つて、書類に目を通す。

4人は、ドキドキして会長の言葉を待っていた。

「はい、探偵部ですね。部員は5名、活動内容も特に問題ないわね。いいでしょう。承認します。木村君、ハンコ取つて。」

会長は、コナンたちに向かって笑顔で言つと、後ろを振り向いて、副会長の木村に話しかけた。

木村は、承認印を渡しながら、

「はい。どうぞ。」

と声を掛ける

「ありがとうございます。では、探偵部の活動を、本日付けで承認します。但し、くれぐれも怪我などしないように活動してください。」

木村に礼を言い、4人に向き直つて言つた。

4人は、満面の笑みで、

「……はい。」「……」

と返事をし、

「ありがとうございます。失礼します。」

と頭を下げ退出した。

「やったね！コレで探偵団、活動再開だよ！！」

「いや、ちょっとドキドキしちゃいましたね。でも、良かったです！」

「本当、良かったわ。活動は明日からで良いわね？」

「ああ、俺も、警部たちに連絡しとかないと。応援要請来なくなっちまうな。」

そう、入学から今まで、一度も警察から連絡がないのは、コナンが警部たちに、落ち着くまで、応援要請は待ってもらうように話していたからだ。

新一の時とは違い、授業中の呼び出しもやめてもらっている。

「とりあえず、今日はもう帰るか。」

「そうね。お夕飯の買い物もあるし。」

「そっか。じゃ、帰ろう。」

「一旦教室に戻って鞆取ってこないといけませんね。」

「ああ、じゃ、行こうぜ。」

と言って、四人は鞆を取りに行き、仲良く帰って行った。

探偵部（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気を引き締めて、頑張りますので宜しくお願いします。

報告（前書き）

お待たせしました。
短いです。

報告

探偵部が発足したその日、コナンは、自宅の電話から目暮警部に電話をかけた。

ブルルル、ブルルル、ブルッ

『はい、目暮。』

「あ、もしもし？目暮警部ですか？」

『そつ、その声は！！工藤君かつ！？やっぱり生きて……！！』

「あの、すみません、江戸川コナンです……。」

『あつ、ああ、コナン君か。いや、勘違いしてすまなかつたね。』

「いえ。気にしないでください。ところで、僕と新一お兄さんの声ってそんなに似てますか？」

コナンは、本人なんだから、当たり前と言えば当たり前のことを訊いてみる。

『ああ、そうだね。よく似ているよ。声だけじゃなく、顔も、頭脳もな。』

目暮は電話の向こうでしみじみと言う。

「……そうですか。」

『だがな、コナン君、君の方が工藤君より、視野が広い気がするよ。やっぱり、仲間がいると違うのかね？そう言えば、探偵団の子たちは元気かい？』

「あつ、今日はそのことで電話したんです！」

『ん？高校には慣れたかな？』

「はい。それで、今日なんです、探偵部を発足したので、授業中以外でしたら、捜査協力が出るようになったんです。」

『本当かい！？部活にしたのか。じゃあ、こちらからも学校側に話をした方がいいかな？』

「いえ、その辺は、活動内容に、警察からの協力要請に尽力すると

明記して、活動許可を取ったので、問題はないはずです。」

『おお、そうか。じゃあ、事件が起きたら、すぐに電話しよう。』

「はい、では、何かありましたら。これからも宜しく願います。」

「

コナンは電話口で頭を下げた。

『こちらこそ、よろしく頼むな。じゃあ、コナン君、また。』

「はい。失礼します。」

と言ってお互いに電話を切った。

コナンが電話を切ると、

「電話、終わった？警部さん、何か言ってた？」

と、エプロン姿の哀が近づいて来た。

その腰をさらう様に引き寄せて、

「ん？ああ、新一と間違われたよ。」

肩をすくめて、優しい笑顔で言うコナンに、

「そう…。」

少し俯いて小さな声で返す哀。

そんな哀を抱きしめて、

「哀、まだ気にしてんのか？コレで良かったんだよ。」

「…っでも！」

涙目になりながら言い返そうとした哀に、

「哀？俺は愛するお前と人生を歩んでいけてるんだ。これ以上幸せなことはない。な？」

真剣な瞳で見つめ、流れる哀の涙を唇ですくった。

「だから、もう泣かないでくれ。いつもの優しい笑顔を見せて？」

コナンの言葉に、哀は涙を拭いながら微笑んだ。

「ありがとう。私も愛してる。とっても幸せよ。」

「ああ、誰よりも愛してるよ。よし！じゃあ、夕飯にするか？」

「ふふっ、そうね。今日はオムライスよ。」

2人は肩を寄せ合いながらリビングへ行き、夕飯を食べるのだった。

報告（後書き）

目暮警部の喋り方がいまいちつかめない…。
次回は何か起きるかな？

教師と刑事

目暮警部に報告の電話をしてから、早数日。

警察からの応援要請もなく、平和な日々を過ごしていた。

「ねえ、みんな！もうすぐゴールデンウィークだよ！！」

歩美がワクワクした顔で話し掛ける。

「そうですね。今年はどうしましょうか？元太君は柔道部で合宿があるって言ってましたけど。」

光彦は少し残念そうに応えた。

「あ、そう言えば、博士が、奥多摩の方に友人のコテージがあるって言ってたわよ。」

哀は思い出したように言った。

「ああ、そう言えば言ってたな。どうする？今年は4人で行くか？」
コナンは哀に頷きながら、みんなに訊いた。

「うーん…あつー！良いこと思いついちゃった」

歩美が何かを閃いた。

「なんですか？歩美ちゃん。」

「「???」」

「あのね、私たちも、合宿にしちゃおうよ！」

「ええ？合宿ですか？」

「うん、もちろん、先生の許可を取ってからだけどね。」

「まあ、そりゃそうだな。」

「でも、合宿って、何するの？学校に居たんじゃ、事件は起きないわよ？」

「って、哀、なんかそれじゃ、『出掛けると事件が起きる』みたい
な言い方だぞ？」

「あながち間違いではないんじゃないですか？コナン君。」

「そうだよ。皆でどこかに出掛けると、いっつも事件起きるし。」

「そうよね。誰かさんが事件吸引体質だから。ねえ？名探偵さん？」
「俺かあ？」

「はい。」

「うん！！」

「他に誰が居るかしら？」

「ははは……、はあ。」

「ふふつ。まあ、そんなことより、やるなら、先生に許可取らないと。」

「そうだね！合宿内容きめちゃおう。」

「まずは日時ですね。」

光彦は机からノートを取り出し、何も書いていないページを開いた。
「あゝ、じゃあ、5月2日～4日とか？二泊三日ぐらいでいいんじゃないか？」

「そうね。だれか、予定がある人居る？」

「大丈夫だよ。」

「僕も大丈夫です。」

「じゃあ、日にちは決まりね。場所は……。」

「博士の友人のコテージでいいんじゃないか？」

「うん、そうだね。学校じゃ何も起きそうにないもんね。」

「では、5月2日～4日で、奥多摩のコテージ……っと。」

光彦は確認しながらノートに書いていった。

「内容はどうする？」

「とりあえず、オーソドックスに親睦を深めるとか？」

苦笑しながら光彦は、

「それは、既にだいぶ深いかと……。」

「そうね。まあ、事件が起きない限りは、各自勉強かしらね？解らないところは、お互いに訊けばいいし。」

と哀がフォローした。

「それが妥当だろうな。」

コナンも、哀の意見に賛同した。

「じゃあ、それで行きましょう。えーと、事件が起きない限りは、各自勉強する…ですね。」

光彦はノートに書き込み、満足そうな顔をした。

「じゃあ、先生に許可取りに行こつ
ふふふ」

と、4人は教員室へと向かった。

探偵部の4人が合宿の相談をしていた頃。

教員室には、3人の男女が訪ねてきていた。

「すみません、探偵部の顧問をしている先生はいらっしゃいますか？」

一番年の若い男性が話し掛ける。

「あつ！はい、私ですが。どう言つたご用件でしょうか？」

探偵部顧問の大友は、見知らぬ3人の男女を警戒しつつ、用件をきいた。

「あ、突然申し訳ございません。私、こういうものでございます。」
と言つて、年配の男性は、懷から警察手帳を出し開いて見せた。

それに倣い、年若い2人の男女も、手帳を取り出し、開いて見せた。

「警視庁捜査一課の目暮と申します。」

「同じく、佐藤です。」

「高木です。」

と名乗つた3人に、

「あつ、えー、探偵部顧問の大友と申します。」

とあわてて名乗り返した。

「今日は、どう言つたご用件で？探偵部の子たちが何かしでかした

んでしょうか？」

少し青ざめた様子で、訊いてくる大友に、

「ああ、いや、違うんです。あの子たちは、警察に迷惑を掛けるような人間じゃありませんから。」

高木は、苦笑しながら言い返した。

「では…？」

安心した大友だが、そうなるとう件が気になった。

「ええ、今日は、探偵部の子たちを度々借りることになるので、ご挨拶にと伺ったんですよ。」

佐藤は、笑顔で言った。

「いや、コナン君には、ちゃんと許可は取ってあるから大丈夫だと言われたんですが、それはそれ、一応、ご挨拶だけはと伺った次第で。」

と、目暮が苦笑しながら付け足した。

「えっ！？じゃあ、彼らが、度々事件を解決してるって言うのは本当のことなんですか？」

「おや、知らなかったんですか？彼らには、小学生の頃から、協力してもらってるんですよ。」

「えっ！？」

「新聞に載ったこともありましたよ。地元では、結構有名ですし。」

「最近では、あの工藤新一の再来かと言われてるくらいです。特にコナン君が、工藤君とそっくりだね。」

「まさか…、本当だったなんて。」

「ん？どうかしましたかな？」

「彼らは、とても優秀な子たちですよ。私たち警察や、大人が相手でも、一歩も引かず、事件の全容を素早く組み立てて、推理し、犯人を見つけだす。卒業したら、すぐにでも警察に欲しい人材ですよ。」

「いや…、そんな、高校生になったばかりの子供に対して、買いかぶり過ぎじゃないですか？」

「何を言ってるんですか！？あれほど優秀な子たちはそうそう居ませんよ。工藤君以来…いや、それ以上かもしれません。」

「そっそんなにですか？」

驚きを隠せずにいる大友に対し、3人は大きく頷いた。

「貴方も、これから、あの子たちと行動を共にすれば嫌でもわかりますよ。彼らがどれほど優秀か。」

「彼らは、手掛けた事件は、確実に解決してくれるので、また、協力をお願いしますが、授業中は避けるので、安心して下さい。」

「は…はい。」

大友は、既に聞いた話だけで、頭がいつぱいになっていて、頷きはするものの、気はそぞろだった。

3人は、挨拶をすませると、呆然と佇む大友をそのままに、颯爽と教員室を後にした。

教師と刑事（後書き）

次回は、ゴールデンウィークの話です。

合宿？（前書き）

ちよつと長くなっちゃいました。

合宿？

5月2日 午前7時50分

探偵部の5人は帝丹高校の正門前にいた。

4人は私服に、1人は学校指定のジャージに身を包んでいた。

「おう！おまえら、俺はこのまま柔道部に行くけど、気を付けて行けよ。何かあったらメールしろよな！！」

元太は大きな声で言った。

「ああ、おめーも怪我しないようにな。」

「お土産買ってくるからね♪」

「柔道部、頑張って下さい。」

「貴方は何も心配せずに柔道に集中しなさい。じゃないと、怪我するわよ。」

コナン、歩美、光彦、哀と、それぞれが元太に声を掛けた。

「おめーらも、怪我しないようにな。休み明け、どんな事件が起きたか教えるよ。じゃあな！」

元太は言うだけ言っと、校内に向かって走って行ってしまった。

「…はは。アイツまで何か起きるって確信してやがる。」

コナンは、半ば諦めたような顔で呟いた。

「起きるでしょ？」

「起きますよね。」

「起きるわね。」

「おいおい…。」

3人に断定され、コナンは、がつくりと肩を落としてうなだれた。その時、

「みんな、おはよう。全員揃ってるな？」

と、顧問の大友がやってきた。

「……おはようございます。」「……」

「はい。大丈夫です。行きましょう。」

「じゃあ、出発！ところで、何が起きるんだ？」

大友は、駅に向かって歩き出しながら訊いた。

「え？」

「さつき、起きるって言ってただろ？」

「ああ、それはですね、何らかの事件が起きるって話してたんですよ。」

「はあ？そんなもん、そうそうあるわけ無いだろう？」

「何言ってるんですか、起きますよ！絶対に。だって、コナン君が居るんだもん！！」

「いや……歩美ちゃん、そんなに力説されても。」

「先生、この合宿中に、私達のこと、少しは分かるんじゃないかしら？」

「この合宿の目的は、先生に俺たちのことを知ってもらうことなんですよ。」

「ん？そうなのか？」

「ええ、先生、顧問なのに私達のこと、何も知らないでしょ？」

「いや、少しくらいなら知ってるぞ。」

……回想……

警察の人たちが帰ったあと、俺は、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

そこに、探偵部の4人はやってきた。

「あつ！！大友先生！」

「良かったです、ちょうど居て下さって。少しお話よろしいですか？」

吉田と円谷が、にこやかに話し掛けてきた。

俺は、その声で、やっと正気に戻った。

「え？あ、ああ……。どうした？」

2人の後ろでは、江戸川と灰原が少し訝しげな顔をしている。

「先生こそ、どうかなさいましたか？」

江戸川が探るような目で訊いてきた。

鋭いな。だが、警察の人たちが来たことは言わない方がいいだろう。

「いや？別に何でもないぞ。そっちの用は何だ？」

ごまかしきれてはいないだろうが、まあ、良いだろう。

「あ、はい。ゴールデンウィークのことなんですが、親睦を深めるために、合宿をしませんか？」

「先生に何の予定もなければですけど。」

吉田が上目遣いで聞いてくる。仕方ないなあって気になるのは何故だろう？

「特に予定はないが、いつだい？」

「5月2日～4日。奥多摩に、私の保護者の友人が持つてるコテージがあるから、そこで。」

灰原は、的確に用件だけを言う子だな。

「分かった。許可しよう。当日は電車で移動だな。朝8時に正門に集合しよう。小嶋は無理だよな？」

「はい、彼は、ゴールデンウィーク中ずっと、柔道部の合宿がありますから。4人だけです。」

「そうか。分かった。じゃあ、今日はもう良いか？ちょっと調べ物をしないといけないんだ。」

探偵団について、少しでも調べていかなければ！

「そうですか。では、僕達も、警察からの呼び出しもないみたいなので、帰ります。失礼しました。」

「おう。気を付けて帰れよ。」

「はい！失礼します。」

よし、みんな帰ったな。

取りあえず、彼らの担任に訊いてみるか。

「阪東先生、ちよつとお聞きしたいんですが。」

「何ですか？大友先生。」

「先生のクラスの江戸川、灰原、円谷、吉田、小嶋の5人なんですが、彼らが、探偵部を立ち上げたのは知ってますよね？」

「ああ。小嶋の件で相談もされましたから。」

「元々、少年探偵団として活動をしてたつて聞いたんですが、何か知ってますか？」

すると、阪東先生は目を見開き、

「えっ！？彼らを知らないんですか？」

「そんなに有名なんですか？」

「ええ、それはもう！！特に江戸川です。彼は、工藤新一の遠い親戚らしいんですが、彼譲りの推理力は、警察ですら舌を巻くほどですよ。それに、中学に入るまで、あの、眠りの小五郎の下に身を寄せてたつて話です。」

阪東先生は、いつになく饒舌になっている。

「へえ、あの眠りの小五郎のねえ。そこで経験を積んだんですね。」

「そうですね！それに、灰原！！彼女も凄いんですよ。大人すら知らないような、薬学・医学の知識で、江戸川の良きパートナーになつてるんです。あの2人は、他の3人とは、比べものにならないくらい、知識が豊富なんですよ。きっと、あの2人みたいのを天才つて言つんでしょね。」

しみじみと言う阪東先生。

「それは……。」

もう、言葉すら出なくなってきた。

「円谷と吉田も、頭の回転が速く、行動力もあるんですが、やはり、あの2人と一緒にいると、目立たなくなるんですね。小嶋は、あ

の中では、異質な感じですね。頭はあまり良くないが、行動力はあるんですよ。それに、柔道を始めてからは、犯人の確保で活躍するようになったとか。」

俺は、最後の言葉に度肝を抜かれて、つい、大きな声を出してしまった。

「犯人！？確保？？？えっ？彼らは、今までどんな事件に遭ってきただんですか？」

「あゝ、挙げたらキリがなさそうなんで、簡単に言いますが…、殺人、強盗、放火、誘拐、監禁等ですかね。」

阪東先生は苦笑してるが、俺には笑えない…。

「そっそっですか…。ネットとかで調べれば出てきますかね？」

「出ますよ。帝丹／少年探偵団で調べれば一発です。」

「そうですか。帰って調べてみますよ。」

その後、俺は、家のパソコンで調べてみたんだ。

分かったのは、彼らは尋常じゃないほど、事件に出くわしているってこと。それに、全てをちゃんと解決に導いている。

事件の詳細や、解決方法が、細かく載っているわけではなかったが、彼らがその場において、後に警察から表彰を受けているという事実は載っていた。

「これは…、俺、大丈夫か？まあ、しばらくは様子を見るしかないな。合宿中に彼らを観察して、今後の対応を決めるか。」

～～～回想終了～～～

「先生？何をボーツとしてるんですか？電車、出ちやいますよ。」
「あっ？え？ああ、すまんすまん。」

数日前のことを思い出していた大友は、慌てて電車に乗り込んだ。

「それで？先生、何をボーツとしてたんですか？」

「いや、何でもない。」

「何でもないわけ無いですよ？僕達のことでしょう？」

「…ああ。まあな。顧問なんだから、お前たちのことを少しは知っておかないと思って、調べたんだ。」「おかしいですね。この前まで、全然気にしてなかったと思いましたけど。」

「何か、調べようと思ったキツカケでも？」

「いや、別に。」

明後日の方向を見ながら言う大友に、

「警部たちが挨拶にでも来たんじゃないんですか？それで、興味を持った。」

呆れたような顔でコナンは言った。

「そうね。きつと、合宿の許可を取ったあの日ね。あの時から様子がおかしかったもの。」

哀は、コナンに頷きながら言った。

「でも先生、どうせ、調べたっていつても、誰かに聞いたとか、ネットで調べたくらいでしょ？」

「それじゃあ、僕達を知ったことにはなりませんよ。今日からの3日間、よく見ていて下さい。」

歩美と光彦は、意味ありげに言つて、笑顔を見せた。

「おい、それはどういう意味」

「あつ！次ですよ。降りるの。皆さん、準備して下さい！」

光彦は、大友が言い切らぬ内に言葉を発し、降りる準備を促した。

「コラッ！俺の話が途中だぞ！」

大友は怒るが、

「先生、そのうち分かるわよ。それまで待つてなさい。」

哀は静かに言った。

「ああ、先生は、俺達を見てるだけでいいんだ。」

コナンは真剣な様子で呟く。

「江戸川？」

「降りますよ。先生。後、バスで15分位です。」

「おい？さっきのはどういうことだ？見てるだけって…。」

話を逸らしたコナンだが、思いの外食い下がる大友に、ため息混じりで、

「言葉の通りですよ。夜にでも、哀と3人で話しましょう。」

「そうね。今後のことをいろいろとね。」

「あ…、ああ。分かった。」

そんな会話をしていると、バスが来た。

「さあ、これで、15分行ったところですよ！乗りましょう。」

光彦が先頭でバスに乗り込んでいく。

バスには、地元の人らしいおじいさんやおばあさんが、数人乗っていた。

5人は、邪魔にならないように、一番後ろに一列に並んで座ることにした。

運転席側から、大友、コナン、哀、歩美、光彦の順番だ。

他愛のない会話をしながら、バスが動き出すのを待っていると、優先席に座っていたおばあさんが、急に胸を押さえて苦しみだした。

「うううっ…！」

「はっ…！！哀！」

「ええ。」

それを目に留めたコナンは哀に合図をして立ち上がり、駆けつけた。

「もしもし？どうなさいました？苦しいのは胸ですか？」

哀は、おばあさんの横に膝立ちになり、背中をさすりながら話し掛ける。

「あ…ああ…」

おばあさんは、うめきながらも、何とか頷いた。

「どなたか、この女性とお知り合いの方はいらっしゃいませんか？」

コナンは、周りの人たちを見回しながら、話し掛けた。

「は、はい。友人です。」

1人の女性が手を挙げた。

「この方は、何か持病でもありますか？何か普段から薬を飲んでる
とか。」

「はい。心臓があまり丈夫じゃないと言っていました。」

「ありがとうございます。哀、荷物に薬が入ってないか？」

哀は、コナンに言われて、カバンに手を入れた。

「カバン、ちよつと失礼しますね。……あつ、あつたわ。」

コナンは振り向き、

「光彦、歩美ちゃん、水持っていないか？」

「あるよ。待ってて。」

歩美は、急いで鞆から、ペットボトルに入った水を取り出して、コ
ナンに渡した。

「サンキュー！哀。」

「ありがと。」

哀は、水を受け取ると、おばあさんを支えながら薬と水を飲ませた。

「さあ、お薬です。慌てなくて大丈夫ですよ。ゆっくり、ゆっくり。

：大丈夫ですか？ゆっくり呼吸して下さい。」

哀は、おばあさんに優しく声を掛けながら、落ち着かせた。

少しすると、呼吸が楽になったようで、弱々しいながらも笑顔で、

「すみません。ありがとうございます。」

とお礼をした。

「いえ。お気になさらずに。」

「大丈夫ですか？」

「おばあちゃん、手を貸すから、ゆっくりでいいんで、椅子に座り
ましょう。」

「さあ、手を。」

歩美と光彦は、おばあさんを両側から支えて、ゆっくりと椅子に座
らせた。

「何から何まで、すみませんねえ。」

「いえ。お役に立てて何よりです。」

コナンが笑顔で言うと、

「でも、心配なので、近い内に病院に行って下さい。」

と、哀も控えめな笑顔で話し掛けた。

「ええ。本当にありがとう。」

「どういたしまして。では、僕達は、次で降りるので、失礼します。お大事に。」

と言って、コナンたちは、自分たちのシートに荷物を取りに戻った。それを、一部始終、無言で見守っていた大友は、4人の的確な対応に戸惑っていた。

周りにいた大人たちも、驚いてる様子だった。

「先生、降りますよ。」

声を掛けられ、ハツとして荷物をつかみ、バスから降りていく。

その時、3人は、先ほどのおばあさんに軽く会釈をしながら降りていった。

しかし、コナンだけは、おばあさんの知り合いだという女性に、

「あの、申し訳ないんですが、まだ、本調子には戻れないと思うので、家まで送ってあげてもらえますか？」

と聞き、女性が、

「あ、はい。分かりました。」

と答えると、

「じゃあ、すみませんが、お願いします。」

と言いながら、頭を下げ、バスを降りていった。

そして、5人はコテージへと向かった。

合宿？（後書き）

合宿編、まだまだ続きます。

合宿？！顧問の苦悩（前書き）

まだまだ事件は起こりません。
今回は、顧問が悩みます。

合宿？～顧問の苦悩～

コテージに着いて、一休みした後、お昼までは、各自、自由行動になった。

コナンは、最近、哀に借りて読むようになった、薬学の本を読み始めた。

哀は、工藤邸の書斎から拝借した経営学の本を読んでいる。

何故、哀が経営学の本を読んでいるかというところ、

～～～回想～～～

ある日、哀とコナンは書斎にいた。

哀は、ある本を手に持ちながら、

「ねえ？この本、借りてもいいかしら？」

と言った。コナンは、頷きながら、

「ん？経営学？いいけど、急にどうした？」

と問い返した。

「この先、必要になるかと思って。」

「え？あ、ああ。そうか？」

「貴方、高校を卒業したら、大学に進むでしょ？法学部のある。その後、探偵事務所を開く予定だし。」

「ああ、そうだな。哀は、また、医学か薬学に進むのか？」

「いいえ、私は、それは十分だわ。だから、経済学部があるところに行こうと思うの。」

「経済？灰原哀で、博士号は取らない気なのか？」

「ええ。必要無いわ。知識だけあれば、あなたの役には立てるでしょ？」

「それはそうだけど……。」

「それに、経済学部なら、貴方の探偵事務所を少しは手伝えるわ。」

経営を私がやれば、貴方は事件と推理に集中できるでしょ？」

「哀……。ありがとう。そこまで考えていてくれて。」

「当然のことよ。私は、貴方なしでは生きられないもの。」

「俺も、オメエのいない人生は考えられないさ。」

コナンと哀は、お互いの愛の深さに感動し、どちらからともなく歩み寄り、抱きしめ合った。

「哀、大学を卒業するまでは、待つつもりだったんだけど……、高校を卒業したら、結婚しないか？」

「コナン！？……本当？いいの？私で。」

「哀、お前以外はあり得ない。」

「嬉しいー！」

哀は、コナンを抱きしめていた腕に、さらに力を込めた。

コナンも、哀をぎゅっと一層強く抱きしめた。

~~~~~回想終了~~~~~

と言うことがあったのだ。

それから言うもの、哀は、書斎に置いてある経営関係の本を度々読むようになった。

光彦と歩美は、大友が何かを考え込んでいるのが気になり、

「せーんせつ！何考えてるの？」

と歩美が話し掛けた。

大友は、驚いて顔を上げた。

「えっ！？な、何だ？」

「いえ、先生が何か考え事をしているようなので話し掛けてみただけなんです。」

驚く大友に対し、光彦は冷静に答える。

「どうしたの？先生。」

歩美は小首を傾げながら訊いた。

「ああ、さっきのことを思い出していたんだ。」

「さつき？ってバスのおばあさんのこと？」

「ああ、おばあさんを心配なさってたんですね。」

光彦は、納得したように頷きながら言った。

しかし、大友は首を横に振りながら、

「いや、違う。お前たちのことだ。」

と言いつつた。

「え？私達？？？」

「何か、おかしいことでもありましたか？当然の対応をしたただけですが。」

光彦も、歩美も、訳が分からないといった様子で聞き返す。

「いや、対応は素晴らしかった。俺が考えていたのは…、あの時、おばあさんの周りには何人が大人もいただろう？だが、一番早く、しかも迅速に動いたのは、江戸川と灰原だった。他の人、円谷、吉田、お前たちや俺を含めて数人は、反応すら出来ずに事態を見守っていた。…何故、あの二人は直ぐに反応出来たのか？その原動力は何なのか？それを考えていたんだ。」

大友は、考えていたことを、一気に吐き出した。すると、少し不満そうに、

「先生、それは間違ってるよ！私と光彦君は、反応できなかったんじゃないもん。動く必要がなかったただけだもん。」

と、歩美は頬を膨らませながら言った。

「そうですね。あの時は、コナン君と灰原さんが先に動いたので、僕達が出る幕は無かったんです。あのお二人は、僕達より、遙かに色々な状況に対処できる知識を持っているんですから。」

光彦も、大友に言い聞かせるように話し出した。

「だから、コナン君は、お水が必要になったときに私達に声を掛け

たんだよ。あの中で、事の成り行きを見ているだけじゃなくて、すぐに動ける用に待機してたのが、私達だけだったから。」

と歩美が説明すると

「あ…、確かに、あの状況で水を求められても、反応できた人はいなかったな。だが、あの二人の冷静さはどこから来るんだ？」

大友は、少し納得したが、まだ疑問が残っていた。

「あれは、経験に因るものじゃないですかね？」

「あと、探偵として、困ってる人とか、苦しんでる人をほっとけないんじゃない？ほら、死体を見逃せないようにさ。」

歩美が笑顔で言い放った最後の一言に、大友は、がっくりとし、

「いや、死体は見逃したいだろ…。」

と呟いた。

「何を言ってるんですか、見逃したら、僕達の活動意義が無くなります。」

と、光彦は胸を張って言った。

大友は、あまりの価値観の違いに戸惑い、話を逸らすことにした。

「あゝ、いや、そつそれよりも、今まで遭遇した事件のことを教えてくれないか？ネットの情報だけじゃ、ダメなんだろう？」

光彦と歩美は少し視線を交わし、頷き合った。

「今までのと言われましても、沢山ありすぎまして、何を話せばいいやら…。」

光彦は、少し困ったように言ったが、歩美は、楽しそうに、

「先生はどんなのを聞きたい？殺人事件？放火犯捕まえた話？誘拐事件？それとも、危なかった話？」

と訊くと、大友は、顔をひきつらせながら、

「一番印象に残ってるのはどんな事件だ？」

と訊いてみた。

すると、そこで、

「ねえ、そろそろお昼じゃないかしら？」

と哀が本を置いて呼びに来た。

「話は、昼飯食いながらでもいいだろ？」

コナンも、哀と一緒に立っている。

「そうですね。まずは、お昼の準備ですね。」

光彦は賛同した。

「うん！じゃ、作ろう、哀ちゃん。」

歩美は笑顔全開で哀に言う。

「ええ。作りましょうか。コナン、貴方はテーブルセッティングよ。円谷君は料理できるなら手伝って頂戴。先生は座ってていいわ。」

哀は皆に指示を出した。

「ああ、わあってるよ。」

「はい、お手伝いします。」

「ああ。分かった。」

コナンは少しふてくされ、光彦は張り切り、大友はぼんやりと返事を返した。

そして、テーブルには、形の綺麗なオムライス、スープ、サラダが並んだ。

「さあ、食べましょう。」

と哀が言うと、

「」「」「頂きます。」「」「」

と一斉に言って食べ出した。

少し食べ進めたところで、

「さっきの話だが、何が一番印象深かったんだ？」

と大友が切り出した。

「そうですねえ。やっぱり、ツインタワービル爆破事件じゃないですか？」

「うーん、そうだね！あつ、古城の事件も命がけだったよ！」

「哀が転校してきてすぐに偽札事件もあったな。」

「スキーに行こうとしたら、バスジャックにあったわよね。」

「先生、どれがいい？それとも、全部？」

「え？あゝ、じゃあ、簡単な概要だけ全部聞くな。」

大友は、何ともいえないような顔で答えた。

その後、途中でお茶休憩をしながら、延々5時間ほど事件について語り続けた。

コナンと哀は、当時、事件の概要が理解できていなかった歩美と光彦にも分かるように、解決した経緯や、必要とした知識などを補足していった。

そんな4人の話を聞きながら、一言もしゃべらずにいた大友だったが、最後に一つだけ訊いた。

「なあ、お前たち、それは、いつの話だ？」

至極当然の質問だった。

「全部、小1の時だよ。」

歩美はこともなげに答える。

「はあ！？小1？あり得ないだろう！なんで高校で習う物理や、薬物にそんなに詳しいんだ？」

大友は目を見開きながら大きな声を出した。

「はあ。そうよね。普通の大人はそう思うわよね。」

哀はため息をつきながら呟いた。

「ああ、俺たちの周りにはいなかったけどな。俺たちも誤魔化してたし。」

「先生、その答えは後で教えるわ。」

と哀が大友に向けて言った直後、隣にいる哀にしか聞こえないくらいの声で、コナンが、

「真実かどうかは別として……な。」

と呟いた。

それには気づかずに、大友は、

「ああ、じゃあ、夕飯の支度にかかろうか。」

と、皆を促した。

哀と歩美、光彦はキッチンへ、コナンは風呂掃除とベッドメイクを

しにリビングを出ていった。

残された大友は、コナンと哀の異質さに疑問を持っていた。

「江戸川と灰原…、あの二人は何なんだ？時々だが、俺より年上のような雰囲気醸すときがある。それに、俺に対して年下に言い聞かせるような物言い…。他の二人を見守るあの目は、友達と言うより、子供や弟妹に向けるようじゃないか？あの二人が、俺に見てるだけでいいって言った意味は？はあ…、俺、どうすりゃいいんだよ…。」

大友の独り言は、誰に届くこともなく、リビングに消えていった。

## 合宿？顧問の苦悩（後書き）

次はコナンと哀と大友先生の会話になるでしょう。  
次話も宜しく願います。

合宿？！生い立ち（前書き）

今回は、コナン、哀、先生の3人で話をします。  
真実か嘘か…。

## 合宿？！生い立ち

夕飯も食べ終わり、各自、お風呂にも入って、後は寝るだけ。部屋割りには、勿論、女子部屋と男子部屋に別れました。

先生は、コナンと光彦と同じ部屋で寝ることに。

軽く雑談を交わしていた5人だったが、既に夜11時になっていた。「そろそろ部屋に引き上げるか？」

とコナンが提案すると、

「うん。眠くなって来ちゃった。」

と歩美が目をごすりながら応えた。

「そうですね。明日もありますし、そろそろ寝ましょう。」

光彦も頷きながら言った。

「じゃあ、コナンと先生は、ちょっと残ってくれるかしら？」

哀は、大友を見ながら言う。

「ああ、今後の相談だったな。」

大友は頷きながら応える。

「よし！じゃあ、光彦と歩美ちゃんは先に寝てくれな。おやすみ。」

「

コナンが挨拶をすると、

「「おやすみなさい。」」

と二人は言いながらリビングを後にした。

「さて。何から話しましょうか？」

歩美と光彦が完全にリビングから遠ざかったのを気配で確認してから、哀は話し掛けた。

「何からって…、とりあえず、なんでお前たち2人は、小1の時点

で物理や薬物、法律とか、詳しくあったんだ？明らかにおかしいだろう？」

大友は、最初の質問を投げかけた。

「ふう、そうですね。先生は、僕達のことを不審に思いますよね。」

コナンは、ため息をつきながら呟いた。

「それは、私たちの生い立ちに関係してるわ。」

哀とコナンは、あらかじめ決めていたシナリオで話し始めた。

「俺の本当の両親は、アメリカに住んでいたんです。けど、仕事の都合で俺だけ日本の親戚に預けられることになったんです。でも、当てにしていた親戚は、高校生の息子を残し渡米していた。」

「それが、工藤夫妻か？」

「はい。で、仕方なかったので、しばらくは工藤新一のもとへ身を寄せていたんですが、如何せん、彼は事件好きだった。あの当時小1だった俺の面倒など見てる暇はなく、隣に住んでいる発明家に頼んでいたんです。」

「その発明家が、私の養父よ。」

「ああ、確か阿笠さんとか……」

「ええ。当時、俺は単身来日していたんで、学校も決まっていなかったんです。そういうのも全て阿笠博士が手配してくれたんですが、彼は、研究をしていると寝食を忘れることがあり、仕方なかったもので、新一が懇意にしていた幼なじみの毛利家でお世話になって、色々な事件に遭遇していったんです。まあ、それまでも、新一が遭った事件の話を聞いたり、工藤邸の書斎の本を勝手に読んでいたりしていたんですが。」

「あら？アメリカでの話が抜けてなかった？」

「ああ、忘れてた。俺と哀の両親は、同じ研究施設で働いていたんです。実は、最近になって分かったんですが、俺と哀は、赤ん坊の頃に会ってるんですよ。……じゃなくて、俺たちは、親が研究者だったんで、小さい頃から本に囲まれて育ったんです。」

「自然と、本を読んで理解できるようにもなったわ。分からないこ

とは、聞けば教えてくれたし。そう言う面では、教育には熱心な親だったのね。まあ、私がほんの小さい頃に亡くなったから、あまり覚えてないけどね。」

「あ…、すまない。辛いことを思い出させたな。」

淡々と言う哀とは対照的に、申し訳無さそう顔をしながら大友は謝った。

「大丈夫よ。今はコナンがいるし、博士もみんなもいるから。」

優しい笑顔で言った哀に、大友はほっとして、

「そうか…。」

と言ったが、次の哀の言葉で、また憐れみの表情になった。

「それに、顔もあまり覚えてない両親より、私を可愛がってくれた姉を亡くした時の方がよほど辛かったわ。」

「哀…、ゴメンな。助けられなくてゴメン。」

俯いた哀の頭を胸に抱き寄せながら、コナンは謝った。

「コナン…、あなたのせいじゃないわ。」

「お…い？何の話か分からないが、ちよつといいかあ？」

コナンと哀が自分の存在をすっかり忘れて二人の世界に入ってしまった、大友は呆れながらも、話し掛けてみた。

「あつ、すみません。」

「忘れてたわ。どこまで話したかしら？」

少し慌てた様子で2人は離れながら言った。

「えーと、両親が教育熱心だったとこまでだ。」

「ああ、そうだった。それで、俺も哀も、小さい頃に刷り込みみたいに記憶に知識を入れていったんですよ。だから、俺たちが、他の子たちよりも知識があるのは、そんな理由です。」

「貴方は、医学、薬学の他に、優作さんの蔵書も読みあさったみたいだし？それは、工藤君と同じように推理オタクにもなるわよね。」

「おい…。オタクって。哀は、両親の様に研究者になるはずだったんだよね。」

「ええ。だから、薬学の勉強をしていたの。私たちが他の子たちと

違うのは、そう言う訳なのよ。」

「そうか…、お前たちも苦勞してきたんだな。」

「いえ、良かったと思っっていることもあるんですよ。英語も喋れるし、授業は聞いてなくても平気だから。」

「いや、おい、授業は聞いててくれよ。」

大友は呆れながら言った。

「ははは…。あとは、何を聞きたいですか？」

コナンは乾いた笑いで返し、真面目な顔に戻った。

「あ…、じゃあ、お前たちの行動力というか、動くための原動力は何なんだ？」

「それは、好奇心と正義感…ですかね。」

「そうね、事件については、知的好奇心を満たし、尚且つ悪を許さない正義感ね。人助けは、人として当たり前のことだけ。」

「人として当たり前…か。確かに。でも、そう分かってはいても、行動できないのが人間じゃないか？」

「そう言う人が多いのは事実ですが、その場合は、何をしたいのか分からないって言うのが主な原因じゃないですか？」

「私たちには、知識もあるし、様々な修羅場も結構潜ってきたから、体が反応するのもかもしれないわね。まあ、私の場合、人助けは罪滅ぼしみたいなものだけど…」

「哀！！お前、まだそんなことを思ってるのか？お前は悪くない。お前には何の罪もないんだ。いい加減、自分を責めるのはやめてくれ。」

「あ……、ごめんなさい。でも、記憶がある限り私は自分を許せそうにないの…。」

「わかった。俺はそんなお前を全て受け入れるさ。お前が自分を許せないなら、俺がお前を許すよ。何度でも言っつてやる。お前は悪くないってな。」

「コナン、ありがとう。」

再び大友の存在を忘れて二人の世界に入って、抱き合っていた。

「お前らさあ、そう度々俺を忘れるなよ。次の質問して良いか？」  
呆れながら言う大友に、

「いや、つい…。」

「ごめんなさいね。どうぞ。」

と言うと、

「じゃあ、二人は、何故他の三人を見る時、子供や弟妹を見る様な目をするんだ？」

と大友が訊いてきた。

ハッとして、二人はお互いに顔を見合わせた。

「私たち、そんな目をしてました？」

「確かに、あの三人は、昔から無邪気で子供らしい子供だったから。特殊な事情で親元を離れ、自立へ踏み出すのが早かった俺たちにしてみれば、弟妹みたいに感じるのも仕方がないのかもしれないですね。」

「そうね。皆、裏表のない真っ直ぐな子達だものね。私達みたいに、歪んでないわよね。」

「歪んでるって…おいおい、自分でそれはないだろう？」

大友は哀の言葉にツツコミを入れた。

「普通は歪むものよ。親兄弟を亡くして、常に危険と隣り合わせ。そんな日常、耐えられる？」

「哀、お前には俺たちがいただろ？」

「そうだぞ。養父も、友達も、恋人だっているんだろ？」

「ふふっ、そうね。私はまだマシな方よね。二人とも、ありがとう。」

「

一生懸命フォローする二人にクスツと笑い、礼を言う哀。

「後は、二人が時々、俺よりも年上みたいな物言いをする事があ  
るが…？」

大友は探るように訊く。

「態度がデカいだけです。」

キツパリと言いきるコナン。

「私、養父にもこんな口調だから。」

哀もハッキリと言う。

「そうか、それだけか。じゃあ、最後に、江戸川が言った、『見てだけでいい』って言うのは？」

「言葉の通りですよ。顧問として、俺たちを見守るだけでいいんです。いずれ、指導者であることが、俺たちの邪魔になるときが来ます。」

「邪魔？」

「ええ。私達は、警察に協力して、時には非情な犯罪者と対峙するときがあるのよ。そんな時、指導者という立場の人間は止めるわけね？」

「ああ、生徒を危険な目に遭わせるわけにはいかないからな。」

「ですよ。でも、それが、俺たちには邪魔なんです。事件を解決するためには、多少の危険は免れない。」

「そう。だから、私達は私達で、先生に責めがいかないように手を打つわ。」

「まあ、ほとんどの場合、先生はその場にいないはずだから、事後報告になると思いますが。」

「おい、じゃあ、俺は何をしていればいいんだ？」

「言ったように、全てを見守るだけです。活動内容についての口出しは一切無用です。」

「あと、1つ忠告。あまり、私達と行動を共にしようと思わないことね。」

「何故だ？俺は顧問だぞ？」

「危ないですから。俺たちといると、十中八九事件が起こります。しかも殺人事件。先生、推理小説にあまり興味ないでしょ？そういう人には耐えられませんよ。」

「ああ、確かに、興味はないが……。」

「無いなら尚のこと、あまり関わるべきじゃないわ。私達はこれまでの経験があるから良いけど、…命がいくつあっても足りないわよ。」

「そんなに危険なのか？確かに、昼間聞いただけでも、爆弾あり拳銃ありで相当ヤバいと思ったが…。」

「俺も哀も拳銃で撃たれたことがあるしなあ。幸い致命傷にはならなかったけど。」

「そうね。銃の痕は消えないしね。だから、悪いことは言わないわ。名前だけの顧問になるか、ちゃんとやる気でも見守るだけにしておきなさい。」「苦勞をかけると思いますので、心勞で倒れないためには、なるべく関わらないことです。」

真面目な顔で言う二人に、

「わかった。忠告、肝に銘じよう。」

と、神妙な顔で頷いた。

「あの三人は、私達で正しい方向へ導いていくわ。」

「警察も側にいるんだし、間違った道は歩ませないと約束しましょう。」

と自信満々で言い切る二人に、大友は、頷くしかなかった。  
とりあえずで訊きたいことを訊いたので、三人は、就寝する事にした。

「片づけはやるから、二人は先に寝なさい。」

と大友は言い、二人をリビングから追い出した。

一人になって、

「とりあえずの、謎は解けたが、些か腑に落ちない気がする…。だが、あの二人とともに話しても、今みたいにかわされるのが落ちだろうな。俺じゃあ、あの二人を言い負かせないだろうし。あいつらの言うとおり、見てるだけにするか。今更、一度引き受けた顧問を辞めるわけにもいかないだろうし。よし！あまり関わらないようにしよう。俺だって命は惜しい。…さて、片づけて寝るかあ。」

と1人、呟いていた大友だった。

まさか、ドアのすぐ横でコナンたちが反応を伺っているとはつゆ知らず。



## 合宿？！生い立ち（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

嘘はつき続けられ、いずれ真実になるのでしょうか。

次回は合宿二日目になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7741w/>

---

5人の高校生活

2011年11月15日05時36分発行